

に転属

八月 樺太国境に向かい、落合で自

衛戦闘

八月 敗戦により抑留

昭和二十年九月 南樺太各地で重労働

昭和二十一年十二月十二日 サハリンより復員

復員後の職歴

昭和二十二年四月 豊橋市内の小、中学校に勤務

昭和二十八年三月 慶応義塾大学文学部史学科通

信卒業

昭和四十四年四月 愛知県科学教育センター勤務

昭和五十三年四月 豊橋市内中学校長勤務

昭和五十八年三月 停年退職

昭和六十三年十月 豊橋教育委員会教育長 勤務

四年

平成四年四月 豊橋市美術博物館長 勤務五

年

平成九年三月 公職を退き現在に至る

主な著書

「歩兵第六十八連隊史」

「われあかあかと生きたり」

「旅はどのあたりか」 (以上、自費出版)

その他共著多数

賞

平成五年 愛知県教育委員会

平成五年 勲五等双光旭日章

平成九年 豊橋文化賞

平成十年 愛知県知事表彰(教育)

(愛知県 斉藤 高志)

私のシベリア抑留記

三重県 太田 勇

一、抑留の経緯

私は終戦の玉音放送を中国東北部(旧満洲)の興安嶺山中で聞き、三年間シベリアに抑留された後、昭和二十三(一九四八)年ようやく復員した

者です。そのころ日本はすでに敗戦の混乱から抜け出して復興に雄々しく立ち上がり、見るもの聞くものすべてが新鮮で、山猿同然の私にはそれがまぶしく目に映ったことを覚えています。

昭和十九年春、松江の航空教育隊で召集解除になり、早速挨拶に訪ねた母校の恩師に奉天農業大学へ行ってくれと頼まれ、その気になって渡満したのが運の尽き。ここで一カ年教職に励みましたが、ちょうど終戦一カ月前に再召集を食らい、朝鮮半島に近い通化の挺身隊に入隊しました。この隊は戦車攻撃が主任務の部隊で、連日爆薬を抱いて敵戦車に飛び込む訓練に追われました。たしか終戦二日前だったと記憶しますが、私は歩工輜重混合の一個中隊を率い、ソ連軍戦車要撃のために出動を命じられました。しかしこの出動は無駄骨で、目的地を目指して強行軍のさなかに停戦の知らせを受けました。急命により鉄道線路に出て、長春から朝鮮へ下る貨物列車に乗り通化へ戻りましたが、時すでに遅く、ここはソ連軍の制圧下に

ありました。「飛んで火に入る夏の虫」とは、まさにこのことでしょう。

通化でソ連軍に拘束された私は、その後吉林の師道学校で三カ月程入ソ待ちをさせられ、十一月の末千五百人の集団でシベリアへ送られました。着いた所はシベリア鉄道の沿線で、ノボパブロフカという地図にもない片田舎の駅でした。辺り一面はすでに雪に覆われていました。チタから列車で三時間、バイカル湖の近くで、シベリア一帯を覆う大樹海の裾野といった所です。その駅前の半地下壕に詰め込まれて二、三日を過ごし、ここから四十キロメートル先の山奥へ歩き始めました。そこに収容所があるということです。

最初の二、三キロメートルは平地でしたが、次第に峡谷沿いの道なき道となり、うっそうとした樹林に囲まれてきます。行けども行けども見事な赤松とカラマツの混合林です。われわれの身柄は否応なしにシベリア大樹海の中に吸い込まれていきました。ここまで来ると、もはや逃げるに逃げ

られず、逃げても日本へたどり着くめどは立ちません。集団はただ黙々と歩くのみでした。そういえば、この移動の途中で逃亡を企てた日本人は少数でなかったようです。私も満鉄線路をフルスピードで走る列車から飛び下りた人を四、五人は見ています。そのたびに列車に乗り込んだソ連監視兵が自動小銃をめったやたらに乱射していました。あの人たちは無事に日本へ戻れたでしょうか、はなはだ疑問に思えてなりません。

行軍を始めて二日目の夕方、行く手が急に明るくなり、あかねさす大空が広がり、白雪に覆われた原野が見えてきました。その真ん中あたりに、丸太を一列に並べ打ちして四角形に区切り、その中に大小さまざまの丸太小屋が幾つも並んでいます。ここが、これから三年間ひたすら重労働に耐え、いろいろな悲喜劇を演ずる収容所でした。旅装(?)を解き、あてがわれた丸太小屋で各自携行の毛布にくるまったのはその日の真夜中でした。シベリアの冬將軍はもうそこまで来ていま

す。果たして耐えられるか否か。明日のことは考へまいと必死になって心を静め、収容所生活第一夜の眠りにつきました。

ここで、私たち千五百人の集団について語らなければなりません。どこでどのように選別されたかは知りませんが、この集団が元將校ばかりであることに気づいたのはノボパブロフカ駅でのことでした。それまでも、日ごろ親しかった人が急に姿を消したり、初めて見る顔が隣にいたりすることはありましたが、入ソ列車がチタにとまったとき、どつと顔ぶれの変わったことを覚えています。多分ここで最終的に編成されたようです。上は大佐から下は見習士官までと多彩で、関東軍の佐官尉官が多数いましたし、歩工砲の部隊長だった佐官はざらでした。憲兵の將校もいました。この人たちは前歴を隠してこの集団に紛れ込んだそうで、それが目を追ってあばかれ、いつの間にかこの集団から姿を消しています。私と大の仲良しだった大尉もその一人で、朝起きるとソ連軍の取

調査に向かいます。あるとき夜遅く収容所に帰ると「太田さん、もうだめだ、ノモンハンがばれた」といいました。その翌日、彼は取調査に向いたきり、再び収容所に戻ってきませんでした。

あれから五十年たった今でも、どこかに生きていてくれたらと祈らずにはおれません。彼は心優しい人でした。吉林の仮収容所で私が熱を出して寝ているとき、リュックの中から高級品の羽布団を引っ張り出し、目の前で二つに切り裂いてその一つを私に着せてくれました。聞けばこの羽布団は奥さんが自分の分身として持たせたものだったそうです。

二、厳寒と飢えと重労働と

シベリア抑留といえは厳寒・飢餓・重労働の三重苦が通り相場になっています。まさにそのとおりですが、個人的につけ加えると流言とシラミがあり、私にとっては五重苦に悩まされた非人間的な三年間でした。

まず厳寒です。シベリアの冬は八月二十日ころの初雪に始まり、十二月から三月までの厳冬期には零下四〇度以下になることがしばしばあります。小便が凍り、便所にピンク色の氷柱が林立し、不用意に素手で鉄製品に触ると手が離れなくなり、晴天でもちらちらと雪（大気中の水分凍結）の降ることがありました。しかし、こんなのは話題にもなりません。私にとって今も忘れ難い経験は、昭和二十一年正月元旦零下六〇度の山中で伐採をしたことです。もちろん一応の防寒具は着ていますが、寒さを通り越して痛さを感じ、五体が硬直して鋸を持つ手の感覚を失い、樹幹に切り跡すらつけられない状態でした。さすがにこの日は作業中止になり、収容所へ戻りましたが、作業に出た班は全員が凍傷を受けたことはいまでもありません。皮肉にもこの日まっ先に悲鳴をあげたのがソ連の監視兵であった点から推して、シベリアでも零下六〇度になることは滅多にない程の厳寒であったようです。この日以来、零下五〇

度以下になると野外作業は中止になりました。

次に労働です。これは収容所によって違います。私たちの収容所では赤松とカラマツの伐採が主な作業でした。二人組の作業で、収容所を出るとき組ごとに一丁の鋸と二振りの斧が手渡されまゝです。鋸は歯の部分が一メートル余りもある大きなもので、その両端に握り手がありこれを押したり引いたりして樹を切ります。斧は、樹を切る前に鋸を当てる幹の反対側をくさび状にかき取ったり、倒木の枝打ちに使います。一日に十数本を伐採しなければノルマにたっしません。倒した樹は枝を払い、決められた長さ（一・五メートルほど、坑木の規格か）に切断し、谷底へ転ばして一カ所へ並べ積み（高さ一メートルほど）します。これをわれわれは「這い積み」と呼んでいました。ノルマを果たすには大体午前中に倒木を終え、午後は枝打ち・輪切り・搬出に時間を使わなければなりません。しかし作業の進み具合はその日の天候（とくに風向風速）や作業場所・樹種に

よって大いに違い、夜の七時八時まで山肌にしがみついていることがしばしばありました。

その日のノルマ達成が早ければ早いほど、収容所へ戻る時刻が早くなります。それだけ体は休み、身の回りのこともできません。私たちは真剣に作業の効率化を考えました。その一つが鋸の改良です。鋭利な、そして樹にかまれない鋸が欲しい、これが皆の願いでした。手始めに専門の目立屋を班ごとに設けました。彼はヤスリを片手に作業場を巡回し、求めに応じてその場で目立てをします。三十分程で見違えるほどの鋭利さが戻りました。もちろん、目立屋の彼にも伐採のノルマはあります。それは全員で負担し、自己ノルマに上積みして達成しました。それでも以前に比べると仕事が楽になり、皆大喜びしたものです。千五百人もの集団になると、目立てのできる器用な人が何人かはいるものです。

それからしばらくたって、樹にかまれない鋸の創作に成功します。袋状になった谷間の山肌は風

が回り、風向きを考えて伐り出しても途中で逆風になり、鋸が樹にかまれて動きがとれなくなりま
す。何とか方法はないものかと考えた末、思いつ
いたのが弓張り鋸でした。材料は米国が援ソ物資
を梱包したスチールベルト（ごみ捨て場に木箱と
ともに山積みされていました）、白樺材で作った
工字型の木枠及び丈夫な張り紐です。スチールベ
ルトは一メートルほどに切断し、片側をたがねで
鋸齒状に切り、切り口をヤスリで研ぎ、両端に穴
をうがち木枠の一方に固定、他の一方を張り紐で
緊張します。これでできあがり。その切れ味の素
晴らしは見事の一語に尽き、谷風を気にせず伐
採ができるようになりました。それ以来ノルマの
達成時間が短縮され、他の組を応援する余裕すら
できました。それにしても米国製鋼材の品質の良
さには驚きました。私は鋸を造ったベルトの端切
りで切出しナイフを造り、三年間髭剃りと鉛筆削
りに併用しましたが、ほとんど研ぎ直した記憶が
ありません。弓張り鋸にはソ連側も大変感心した

模様で、作業大隊長（収容所の長）も我々の作業
場へ来て自ら鋸を持ち、みるみる二、三本の立木
を倒し、感じ入っていました。

その日の伐採が赤松かカラマツかも関心事の一
つでした。稜線が東西に延びる場合、南斜面は赤
松、北斜面はカラマツと相場はきまっています。
赤松林に入るとホッとしましたものです。それはカラ
マツに比べて赤松は伐りやすく、幹の太さに根元
と樹の先との差が少ないので用材が多く取れ、ノ
ルマが果たしやすいためです。カラマツは鋸を入
れる根元の部分がやたらに太く、先端に向かって
急に細くなります。それゆえ倒木に時間を要する
割には石数が出ず、本数を多く伐らなければなり
ません。それだけでなく、カラマツは樹脂が多
く、鋸の切れ味を悪くするので皆が嫌がった樹種
です。切り株からしみ出た白色の樹脂をソ連の監
視兵はチューインガムのようにかんでいました。
まねをしましたが味もそっくもありません。歯垢
の掃除に少しは役立つように思いました。彼らの

習慣かもしれません。

ところで、伐採のノルマはどれほどであったか。正確な数字が頭に浮かんできません。多分十五ないし二十立方メートル程度であったと思います。谷底に近い斜面に、用材（坑木）を這い積みにして検査兵に見せません。彼はその縦横高さを測り、材積（立方メートル）を計算し、ノルマ以上であればオーケーを出し、われわれは下山して収容所へ戻ります。その計算ですが、ソ連の兵隊は算数に弱く、こちらの胸算用と違い言い争いを起こすことが度々ありました。このようなとき、記憶の限りでは我々の胸算用の方が正確な場合が多かったように覚えていません。総じて彼らは計算が下手くそでした。

さて、伐採の話が長くなりました。私たちは一年三百六十五日伐採ばかりをしていたわけではありません。それ以外にも多種多様な労働をしました。暖かくなり、材木に樹液の流動が起ると伐採ができなくなります。伐採に代わる作業として

林道の新設拡幅、坑木の搬出と貨車（シベリア鉄道）積載、製板、れんが焼き等々の仕事に従事しました。林道づくりと貨車積載は出稼ぎで、作業場に宿舎を建てるか既設建物に泊り込む作業でした。したがって夏場はほとんど収容所で寝起きしたことはありません。

入ソ二年目の夏、天気の良い日は樺太が見えるという沿海州のソフガワニまで出稼ぎに行ったことがあります。三十両編成の貨物列車の旅で、そのうちの一两は煉瓦のかまどを築き、走りながら飯を炊く大がかりの移動でした。ハバロフスクから北に向かい、コムソモリスカヤから有名なバム鉄道に入り、十六日間乗りっ放しでようやく目的地に着きました。当時のバム鉄道は米国の援ソ物資輸送に急造した鉄路で、路床が軟弱で速度が遅く、機関車はまきをたいて走る始末、このため距離の割には時間を要したものと思います。ソフガワニは漁業の町、鱒漁が盛んです。塩鱒製造場が港の近くに軒を並べていました。収容所を出ると

きソ連兵が「栄養をとらせてやる」といった言葉が、ここに来て始めて分かりました。それにしても、栄養物のある所へ人間を運ぶ発想は、いかにも遊牧民を先祖に持つ人種らしい物の考え方だと、変なところで感心したものです。

早速漁労班と製造班に分かれて作業開始です。

漁労班は朝早く定置網の引き上げに海（日本海）へ出ます。私は製造班で、専ら水揚げされたマスの内臓を除き塩漬けする作業に回りました。ここで、恥ずかしながら、獲りたてのサケやマスはカツオのように丸々と太っているものだと初めて知りました。まず腹を切り、内臓を捨て、水洗いします。次いで鰓（えら）をこじ開けて岩塩を詰め、さらに腹にも多量の岩塩を押し込み、これを十匹ほど板に並べます。ここまですがわれわれ日本人の仕事です。建物内には直径三メートルもの大樽が半地下式に幾列も据えてあります。樽底には漬け方専門のソ連人がいて、マスを並べた板を渡すと受け取るや否や両腕を右から左へサッと振

り、菊花模様にすき間なくマスを並べます。その速さと鮮やかさには驚きました。熟練工といったところでしょうか。一段並べ終わるとマスの姿が見えなくなるまで岩塩を投げ入れ、足で踏み固めて上段へと詰め上がります。

先に内臓は捨てるといいましたが、卵（イクラ）とシラコ（精巢）は別です。ここで働くソ連人は黒パンと塩漬けのイクラを持参して昼飯にっていました。彼らもこの二品は大の好物であったようです。我々日本人の食事は毎食マスの焼き物、イクラや白子の半熟などで、時にはコチ、カレイの煮つけ等も出ました。聞けばソ連人は着色魚や軟体魚は食べないそうで、漁労班の日本人がわれわれの食材にと炊事場へ届けたものです。とにかく連日魚攻めで、中には野菜にあこがれ、野草取りに出かける連中もいたほどです。

一夏のマスの饗宴は一カ月ほどで終わりました。せっかく樺太が手の届きそうな所に来ていながら、われわれの帰路は日本へ向かわず、また半

月をかけてノボバプロフカの山奥へ戻りました。途中、ハバロフスクに数日間滞在し、ソ連軍が満州から奪って持ち帰った戦利品の整理をさせられました。それらの品は幾棟もの倉庫に乱雑に置かれていましたが、その種類と量の多さには驚きました。この分だと、今満州は砂漠のようになっていいるだろうと、正直なところ思ったほどです。我々に整理させた倉庫には武器らしいものも一つもなく、一般人が日常生活に使う品物ばかりでした。例えばトタン板・台秤・柱時計・自転車・薬缶等々で、それがまたどれ一つとっても完全な形をしたものがなく、何の目的で略奪し、ソ連領へ運んだかが疑われるものばかりでした。ただ一つ、これかと思つたのは松花江（スنگアリー）の発電所施設を根こそぎ運んでいたことです。しかし、ここまで持って来て、後は野ざらし日ざらしでは余りにも芸のない話だと思いました。

收容所に帰り、留守居の人たち（高齢者と出発時体調不良者）と久闊（きうくわん）を叙したのは八月も半ば

を過ぎたころでした。

三、收容所の衣食住

次に、飢餓体験を含めてノボバプロフカ收容所の衣食住を思い出すままに書きとめたいと思います。何しろ戦勝国のソ連自体、戦争で国力を使い果たし、その国の人でさえ粗衣粗食に甘んじ、乏しい配給とわずかな自留地を耕して生活の糧としていた状態ですから当然のことだと思いますが、この量とこの質の食料で、よくぞ生き延びたものと我ながら感心しています。

入ソ一年目は毎日が空腹との戦いでした。朝食は黒パン三百グラムと缶詰空き缶に一杯のスープ、昼食は断腸の思いで残した朝食の黒パン、夕食は米飯（雑穀のこともあり）と羊肉か魚、これが常食で、時には少量の乾燥果実（リンゴ）が加給されました。先年朝日新聞社が発刊した「アルバム・シベリアの日本人捕虜收容所」を読むと、当時支給された糧秣の定量表が載っています。抑

留者が持ち帰ったものだといいことですが、書き物はすべてナホトカで没収されたはず。事実ならば「よくぞ持ち帰った」と拍手を送りたい気持ちです。表に示された種類と量は正しいと思いません。ただ食器に盛った量になると表より少なかったようです。それは例えば魚類は尾頭つき、肉類は骨つきの目方で支給されたからです。私も時々炊事場の使役に出て、ソ連側の倉庫から収容所の置き場へ食材を運びましたが、その受け渡しは双方の厳重な監視のもとで行われていました。

炊飯は日本人みずからが炊事係（十人ほど）を選び、専従で私たちの食事をつくってくれました。乏しい材料を工夫に工夫を凝らし、少しでも皆が満腹感の持てるよう、そして健康が保てるように調理してくれました。中でも忘れられないのは、あるときの食事に鮭の押しずしが振る舞われたことです。塩鮭を塩抜きした赤身がネタ、米はウクライナ産の銀シャリです。口中がとろけるようならまさでした。聞けば一カ月も前からこの献

立を計画し、材料を毎日の定量から少しずつ残して蓄えたものだといいことでした。

しかし、炊事係の人たちがいかに努力してもできないのは食材の増量です。これは個人の自助努力しか手がありません。そこで皆が思いついたことは、野草をはじめ自然の恵みを己のエネルギーに換えることでした。入ソして三、四カ月を過ぎたころ、長いシベリアの冬もようやく終わりに近づいたある日、伐採に出かけた山肌で、私は雪の下に黒いキノコを見つけました。よく見ると辺り一面に同じキノコがあります。試しに少し採って持ち帰り、仲間と塩ゆでして食べました。柔らかかく、そのくせ歯ごたえがあって風味もよろしい。これだと思いました。次の日から班全員にその話をして伐採労働の帰りにはキノコ採りをすることにしました。これが野草採りの始まりです。このキノコは昨年生えたもので、積雪に保護されて腐らずに越冬した、いわば乾燥茸でした。それから一カ月ほど過ぎて野山が緑になると、あるわある

わ、山の斜面に新鮮なハツタケがあちらこちらに見られます。大げさでなく、私は傘の直径約二十センチメートル、柄の太き四センチメートルというお化けキノコを何株も見ています。ちょうどその頃から日曜日は休日となり外出も自由になりました。これ幸いと日曜日は皆が揃って野草採りに出かけました。野草に関する限り私がリーダーです。その責任もあって、あらかじめどの山肌には何があるかを調べておき、次の休日に皆を案内します。収容所近辺で見つけた野草の種類は十指に余りません。いま思い出せる野草だけでも、ネギ（野生）・ニラ・シベリアほうれんそう（私の命名）・アザミ・山ブドウ・コケモモなどがあります。

野草採りはさらに発展して蛋白源の採集にも手をつけました。これは偶然のことですが、伐採に出た休憩時、私は太い赤松の自然倒木を見つけ、その樹皮をはぐと樹皮裏に唐草模様によく曲がりくねった細い溝があり、長さ三、四センチメートル

の虫がいます。何の幼虫かは分かりませんが、見たところは真っ白できれいでした。辺りを見るとあちらにもこちらにもいます。これは食べられると直感しました。急いで飯盒の中蓋にいったいなるほど拾い集めて班へ持ち帰り、暖炉の火で焦げ茶色に煎って皆で試食したところ異口同音に「これはうまい」と言います。さあ、それからというもの、伐採ノルマを一刻も早く果たして虫集めに熱中する連中が増えました。この代物、味も色も落花生に似ることから私は「シベリアピーナッツ」と命名して収容所の評判になりました。この虫の正体は今も不明です。しかし樹皮がすみかであり餌でもあるので、無毒で栄養たっぷりであることは間違いありません。また、シベリア鉄道のノボバプロファ駅で木材の貨車積みに夏の終りを過ぎたことがありますが、その折、林道を抜けた山裾の小川でハエの大群を見つけ、網代わりを手ぬぐいなどですくい取り、思わぬごちそうにありついた記憶もあります。

ベースとなるソ連側の給与だけでは質量ともに人命を支えきれません。私のいた収容所にはそれを補う自然の恵みがあったように思います。その証拠に炭鉱や都市労働の収容所では犠牲者が多く、ある収容所では千五百人の日本人が一冬過ぎた頃は二百人になったという話を聞いたこともあります。それに比べ、われわれの所は三年間に七、八十人の犠牲にとどまっています。私は四月の雪解けに犠牲者の死体を数回埋葬しましたが、死因はほとんど栄養失調によるものでした。埋葬した場所と埋葬法は今でもはっきり記憶しています。

収容所生活で得た最大の教訓は、自然との共生がいかに大切かということでした。物言わぬ雑草や地をはう虫けらから、もっと多くを学べということでした。

次に住まいと日常生活の思い出をつづります。収容所は一般起居の建物・炊事場・作業場・倉庫・医療所・トイレなどから成っていたと記憶し

ます。建物の数や大きさは使用目的で違い、もっとも多いのは一般起居の建物でした。私の暮らした建物について見ると、二十人ほどが上下二段で寝起きできるスペースで建てられていました。樹皮をはいだ赤松丸太を横に重ね積みした矩形の小屋で、言わば校倉あせくらの原型とも言える建て方です。

当然上下の丸太の間にすき間ができ、近くの谷間から集めたコケでうずめてありました。長辺の中央が出入口で、その幅で土間があり、両側が上下二段の寝場所になっていました。屋根は板ぶき、一人分のスペースは奥行き一・八メートル、幅八十センチメートルほどでした。土間にはドラム缶を縦半分に切って造った暖炉が一基据えてあります。窓はありません。各自はわが席の奥にリュックを置き、それを枕に持参の毛布にくるまったものです。入ソ当座は照明が全くなく、ソ連側に交渉してローソクの支給を受けたように記憶します。伐採が始まり、赤松の根元や樹幹の傷ついた部分に樹脂が多く集積することを知り、この部分

を切り取り細く割って乾燥し、これを燃やして照明にしました。ローソクより数倍明るく、読書が可能です。しかしこの方法は煤煙が多く、朝起きると顔が真っ黒になっていました。

一棟ごと当番がいました。日替わりの順番制で、伐採は免除されますが、小屋内外の清掃・食事受領と配膳（黒パン切り）・暖炉たき・照明用松やにの準備・飲料水雑用水の準備（谷水汲み）などを担当します。また入浴は月に一度か二度ソ連兵が引率して少し山を下り、既設のトルコ風呂に行きました。多分駅の近くのノボバプロフカ村に住む人たちの保養的な施設を利用したものと思います。後に日本人は風呂好きと知り、ソ連側が収容所の近くに浴場（トルコ風呂）を造り、週に一度は入浴することができました。私は何度かトルコ風呂の石焼きと焼けた石に水をかける当番を勤めたことがあります。

入ソして二年目も終わるころであったと記憶しますが、収容所に大改造があり、二棟に全員が寝

起きできるほどの大住居の建設が始まりました。

伐採が可能な期間は伐採と建築の両班に分かれての作業でした。大住居は長さ五十メートル、幅十五メートルほどだったと思います。記憶に間違いがなければ半地下式で木造の校倉型でした。棟梁は日本人です。多分ここの所長（作業大隊長）がイルクーツク、ウランバートル、タイシェットなどの日本人収容所を視察し、その建築技術のすばらしさに驚き、ぜひわが収容所でも、と思いついたのではないのでしょうか。棟梁は大学の建築学科でも出た人のように、私も一度彼のノートをのぞいたことがあります。難しい計算値がいっぱい書かれていたのを覚えています。建築は二カ月ほどで終わり、広々とした使いやすい部屋に移り、皆大喜びをしたものです。

この建築工事が終わって間もなく、今度はソ連側が収容所の電化を計画します。こんな山奥まで電線を引くのかと思いのほか発電所を造れとのご託宣。これには皆驚きました。発電機はと尋ねる

と、近くノボバプロフカ駅に着くという。水力か火力かと聞けばもちろん火力だという。ならばボイラーはと聞えば、駅に古い蒸気機関車がある。

燃料はと聞き返すと、周囲の山を指さして「ムノーゴムノーゴ」(「沢山ある」の意)。なんとおおらかな人種だろうと思いました。だが、心配は無用でした。その道の達人がわれわれ日本人の中に幾人かいたのです。この人たちが中心になって計画を練り、設計をし、工事の現場指導に当たりました。この時ばかりはソ日が逆転して日ソになった形で、日本側ペースで工事は進められました。

発電所は収容所から二、三百メートル離れた谷川に近い台地が選ばれました。理由は水補給の便利さによります。私は発電所建設工事の第一着に参加しましたが、春近しというのに土はまだ固く凍り、穴掘りに手間のかかったことを覚えています。しかし、工事は順調にはかどおり、建屋が完成するころにはボイラーや発電機が駅から運び込ま

れ、数日後には据えつけが終わりました。ボイラーのたき手は日豊線機関士の経験をもつ元少尉が二、三人の助手をつけて引き受け、私はまき割りや山からまき材を伐り出したり、馬そりを使って谷から水を運ぶ役に回りました。

ところが、配電工事は難航しました。送電にふさわしい被覆電線の入手が難しいこと、碍子はシベリアじゅう捜しても手に入らないことが主な理由です。そのため議論に議論を重ねた結果、配線は裸の鋼鉄線(米国の援ソ物資)を利用する、碍子は煉瓦焼き窯を使ってわれわれの手で造ることになりました。早速数十人が土をこねて土偶を造り、細い木の棒を差し込んで穴をうがえます。他方で塵捨場から割ガラスを拾い集めてこれを砕き、土偶にまぶして数日間乾燥します。干し上がった土偶を煉瓦窯に入れて焼くと、ガラスが溶けて土偶を覆い、完全な絶縁体ができます。これに木の棒を差し込めば碍子のできあがり。配電工事は急ピッチに進み、ソ連軍の建物は無論のこ

と、収容所内のすべての建物に配線されました。一灯三十ワットの電灯が収容所を不夜城化したこととは言うまでもありません。ちなみに碍子を作った煉瓦焼き窯は、先に書いた我々のソフガワニ出稼ぎの留守に、居残り組が労働のために築いたもので、帰ってみるとこの人たちの焼いたれんがが山のように積まれていました。残留者は中年以上か体に病気けがなどの故障をもつ人たちばかりでした。

電化後、収容所の生活は一変しました。これまでは暗くなれば寝、明るくなれば起きるという状態で、作業から帰ると当番以外は大抵寝そべって夕食を待ち、食後はごろっと横になる。それでいて食事時には食缶から各自の食器に分配する当番の手元を目を皿にして見詰めるというありさまでした。ところが電灯がともると、これまで忘れていた読書や書き物が盛んに行われるようになり、食事への注目度が激減しました。届くはずのない家族あての手紙を書く者、リュックの底から文庫

本を取り出して丹念に読みふける者、好きな細工物に励む者などさまざまでした。また、娯楽もよみがえり、手製の牌や駒で麻雀、将棋を楽しむようになりました。遊び道具は白樺材の手製です。麻雀は卓牌携行で伐採に出役する連中まで現れた程です。演芸も復活しました。毎晩のように演目を変えて人を集めます。もっとも演芸は電化前から、のど自慢・舞踊・一人芝居・声色物まねなどがありました。電化後は照明の力を借りて一層派手に演じられるようになりました。今も記憶に残る一つは、日本のラジオで人気番組になった吉川英治作「宮本武蔵」を朗読した徳川夢声の声色物まねがあります。夢声の再現を思わすような語り口と、小説の筋がすらすら口に出るところは素人の域ではないように思いました。毎晩のように、こちらからせがんで一席聞き、それを安眠剤にしたものです。演者は東北地方出身で、ふだんは朴訥な無口の人でした。

芝居も年に一、二度ありました。昔見た芝居を

思い出して演ずるものですが、そのたびに私の感心したのは衣装です。女形は顔を真っ白に塗り、赤やピンクの衣装を着、かつらも、ちょんまげも、ちゃんとつけていました。それらの品を一体どこから仕入れたものか、今もって私には謎です。もし手製だとすれば、玄人はだしの出来栄でした。

「ダモイトウキョウ（日本に帰る）」ソ連側が常用するこの言葉ほど、日本人の心を捉え魅力的な言葉はありませんでした。たとえそれがうそと分かっていても、言葉のどこかに一抹の真実を含んでいないかとせんさくしたものです。吉林をたつときからこの言葉に踊らされた三年でした。しかし、よく考えてみると、帰れるか帰れないかはスターリンの胸三寸にあったわけで、ましてシベリア駐屯のソ連軍にその権限はなかったはず。踊らされたわれわれ日本人の考え方に甘さのあったことを認めざるを得ません。

収容所では時々私物検査がありました。朝起き

て伐採に出役する準備をしていると、不意に「ダモイトウキョウ」と言い、一切の私物を持って戸外に整列せよと触れてきます。慌てて身辺の物全部をリュックに詰め外に出ると数人のソ連兵がリュックの中を徹底的に調べました。このとき刃物類が発見されると容赦なく没収します。刃物は時に凶器に変わることがあり、ソ連側が最も警戒したようです。発見される刃物は多種多様で、ほとんど手製でした。これらは収容所の柵外に建つソ連側の金工場や荒物捨て場から拾った材料で製作した日常必要品や作業用具でした。前述の弓張鋸もその一つです。日本式のみ、かんなは廃トラックのスプリングを利用したものでした。検査が終わると「ダワイ」の一言で、散乱した私物をリュックに詰め直し、自分の小屋に戻ります。このような検査が二、三度続くと我々にも知恵が生まれ、没収されそうな物はリュックに詰めないようになり、検査が無意味になって、いつしかんだように記憶しています。

シラミ・ノミ・南京虫、これは集団生活につきまとう厄介な害虫です。シベリアではシラミと南京虫に悩まされました。収容所ではシラミに、出稼ぎ先では南京虫の襲撃に苦しめられたものです。シラミは入ソ早々に蔓延し、駆除班ができた程です。もともとシベリアにいたものかあるいはわれわれ日本人が持ち込んだものか定かではありませんが、入ソしてノボパブロフカ駅に着いたとき、私の下着には数匹のシラミが動いていました。誰からともなくシラミは寒さに弱いと聞き、その下着を一晚雪の上に広げておきましたが効果がなかったことを覚えています。収容所に入るとにわかには広がり、ソ側に対策を要望しました。ソ側も作業に支障を来してはと思ったのでしょう、早速柵外に熱気駆除室を造り、所内で集めた各自の衣類をつるし、大型暖炉を据えて摂氏七、八〇度の熱気に一昼夜さらしました。この方法は思いのほか効果を挙げましたが、火災の危険があり、見張りを怠ることはできません。そのため暖炉た

きと火災防止に不寝番制を設けて駆除と防災に当たりました。シラミ退治に不寝番が必要とはシベリアならではの話でないでしょうか。

南京虫の大襲撃は先に述べたソフガワニからの帰路、ハバロフスクの宿舎で遭遇しました。この虫との出会いは初年兵時代を過ごした朝鮮半島（韓国大邱）ですが、この宿舎で見た南京虫の猛威は初めての経験でした。確かなことは分かりませんが、宿舎は元刑務所の建物であったということです。非衛生的な建物で、入口は小さく舎内は物が散乱し、先ほどまで四人が詰め込まれていたと思える宿舎でした。ハバロフスクに滞在中、夜は野外の仮眠で過ごしたことを覚えています。

四、抑留所の思想教育

帰国後しばらくの間、多くの人から「共産主義の教育を受けたか」「共産党に入党を勧められたか」との質問を受けました。もっともな話で、この主義思想の国に三年も抑留されていると、大い

に吹き込まれてきただろうと想像されるのも無理はありません。しかし、私にとってこの種の質問ほど苦手なものはありませんでした。私自身「はてな」と首を傾けたくなる難問です。事実、シベリアでソ連人から直接共産主義の話を聞いたたり共産党へ入党を勧められた覚えはなく、赤旗の林立する集会など見たこともありません。しかし、何もなかったといえぼうそになります。このような場合、私はいつもシベリアでの体験を赤裸々に語り、聞き手の判断に委ねることにしていました。私の体験とは次のようなものです。

入ソして半年ほどたったころ「日本新聞」という日本語の活字でタブロイド版の刷り物が配られました。食物だけでなく活字にも飢えていたので、みなむさぼるように読みました。発行所も発行者名もない新聞です。記事はソ連の戦後復興の様子とか日本の政治を批判する文章が所狭しと並んでいます。私たちはその内容から、ソ連の宣伝機関の発行でソ連人の書いた記事だろうと想像し

ていました。ところが、しばらくしてこの新聞に日本人の書いた記事が載るようになりました。その人の名は諸戸文雄といい、大麥筆の立つ人で、文意明快説得力を持つ記事でした。月一回ほどの配布でしたが、手元に届くとこの記事を真つ先に読んだものです。文の内容はソ同盟（ソ連の正式名称）の礼賛と米軍政下の日本の現状批判が多かったように覚えていきます。今我々が置かれている立場についても「食料や日用品の不足は抑留者だけでない。ソ連自体も戦争による国力の消耗に苦しんでいる」として「今のうちにソ連から学びべきものは学び、帰国後の糧にしよう」と訴えていました。筆者の素性は不明ですが、文の端々から同じ抑留者であることがうかがわれ、記事の内容よりも、同じ立場にありながら、机に向かい、軽いペン一本で生活する執筆者をうらやましく感じたものです。断定できませんが「諸戸文雄」はペンネームで、ソ連の有名な政治家「モロトフ」をもじったものと想像しています。「注 前に述

べた朝日新聞社刊行の書物によると、「日本新聞」は終戦一カ月後の一九四五年九月にハバロフスク市内でコワレンコ中佐という軍人を発行責任者とし、抑留者を対象に発刊されたもので、一九四九年十一月まで続けられ、その回数は六五〇号を数えたということです」

「日本新聞」の論調は回を追うごとに厳しさを増しました。中でも日本の米国一辺倒の政治姿勢や天皇制の批判はすさまじく、敗れた日本は今どうなっているのか、帰り着く故郷はあるのかと本気で心配したものです。そのころの記事で、天皇が「帝国ホテル」と書いた看板を担ぎ右往左往している漫画は、今も深く印象に残っています。このような報道と並んで戦後ソ連の復興と社会主義の躍進が民主運動の成果として報じられました。新聞論調はそのまま収容所の空気となり、所内のあちらこちらで小さな車座集会が持たれるようになりしました。そこでは大抵の場合、所内の規律や日常生活（労働を含めて）のあり方を改善する話

し合いが主であったように記憶します。私たちの収容所では入ソ早々に旧階級を捨てて上下のない抑留者集団として何事も行っていましたので、それを民主化と呼ぶならばシベリアで最も早く民主化した収容所であったかもしれないません。聞くところによると、当時他の多くの収容所では、まだ旧軍隊の階級制がそのままかり通っていたそうです。

しかし、日時の経過とともに、私たちの収容所にも旧階級の脱却だけでは飽き足りない空気が漂い始め、何事も民主的にやろうとの意見が強くなってきました。「日本新聞」の論調に刺激された動きであったことは確かです。その結果、この運動を進める中心的な組織を作ることになり、民主化に熱心な数人の委員を選びました。この人たちを「アクティブ」と呼び、各小屋（班）にはそれを補佐する連絡係を置きました。アクティブの長は旧陸軍士官学校出の人で、みな「軍人魂をたたき込まれた人が」と驚いたものです。ソ連側は

この組織に大変好意的で、委員長ほか二、三の委員は労働を軽減されたように記憶しています。

この段階から壁新聞の編集や作業能率の向上・自発的作業の奨励などが目立つようになります。

私も二、三度壁新聞に投稿してトップ記事に扱われたり、作業能率の向上では一、二のヒントを申し出たことがあります。しかし自発的作業だけは体力に自信が持てずしり込みをしました。自発的作業とはノルマ以上の労働を行うことです。当時ソ連にあった「スタハーノフ運動」の抑留者版でした。ちなみに「スタハーノフ」とは人名で、当時自己に課せられた以上の仕事をして国民的英雄に祭り上げられた人物だそうです。

先ほど私は壁新聞に投稿したと書きましたが、それには理由があります。投稿して採用されると、私が元気であることを日本のラジオで放送し留守家族に知らせるといふ褒美があったからです。帰国後聞くと、この約束はりっぱに果たされていきました。留守居の者は直接放送を聞かなかっ

たそうですが、全国から放送を聞いたという手紙が届けられ、中にはわざわざ訪ねてくれた親切な方もいたそうです。家族の者は半信半疑の中にも少しは安心感に浸ることができたのではないでしょう。連絡くださった方々に心から感謝しています。

さて、これはアクティブの活動によるものか否かは不明ですが、民主化運動の深まったある日『共産党小史』なる書籍が配られたことがあります。班ごとに五、六冊だったと思います。菊判の千ページもあるかと思う分厚さで、文章はもちろん日本語です。著者名はありません。しかし、その道の専門家でないし理解できない用語が随所に散見されましたから多分在ソ日本人（亡命者）の著作か翻訳本ではなかったかと思えます。内容を見るとマルクス・エンゲルスの『資本論』『共産党宣言』から説き起こし、レーニン・スターリンの事績が詳細に述べてあります。それらを逐一紹介する力は、残念ながら私にはありません。た

だ、今も印象に残るのは、弁証法的史的唯物論、ボルシェビキ、メンシェビキなど世界史で聞いたことのある言葉が微に入り細にわたり解説されていたこと、及び「ソ連は共産主義国家でなく、共産主義国家を目指して進んでいる社会主義国家である」という一節です。今にして考えるとき、ソ連は民主化運動を鼓舞することで抑留者の頭を地ならしし、徐々に思想的な面を吹き込もうとしたのではないのでしょうか。これに対し、私たちの収容所では大部分の人が帰国を大目標としており、すべては帰国した上で考えればよいとしていましたから、民主化運動も「今」の生活環境と労働の改善以上には出なかつたようです。

ここまで書いて、小史に関係する一つの経験を思い出しました。レーニンがロシア革命に成功した日はちょうど私の誕生日でした。大正六（一九一七）年十一月八日です。ソ連では毎年この日を革命記念日と称し、前後三日間を休業日としてお祝いをしていました。我々抑留者もお相伴にあず

かり作業を休むことができ、特別献立の食事にありついた年もあります。農家の七人兄弟の末っ子に生まれた私は、これまで誕生日を祝ってもらった記憶がなく、シベリアに来て初めて自分の生まれた日にめぐり会えた気分になったものです。

さらに、こんなこともあります。それは入ソ二年目の革命記念日の前日のこと、私は一人でソ連兵舎の炊事場へ使役に出ました。仕事は記念日のごちそう作りの手伝いで、作業は釜たき。ごえもんぶろほどもある釜で、中身はすでに仕込んであり、ふたがされていました。ソ連兵は私を待ちかねたように「二時間ほどたけ」と言い残して姿を消します。私は黙々と釜をたき続けます。次第に湯気が立ち込めてきますが、においは一向に感じません。時計は予定の時刻に近づいていました。単なる湯沸かしかと思っていると、そこへソ連兵が再び現れ、ふたを少し開けて釜をのぞき「ハラショー（ちょうどよい、よくできた）」といいきなりかまどへ駆けあがり、ふたを取り除きま

した。そこで私が見た中身は、意外にも角をつけた丸ごとの牛の頭でした。ゆらゆらと黒い毛が湯の中に漂い、角とみけんの辺りが湯煙の中に浮かんで見えます。あっけにとられて眺めている私をしり目に、彼は二本の角を両の手に持って湯の中で上下左右に激しく揺り動かします。そう、五、六分ほど振っていたでしょうか。さっと挙げた彼の手には角つきで白骨化した牛の頭蓋骨がありました。私の使役は、彼らが祝う革命記念日の特別献立用ロシアスープの素材作りであったのです。

五、医療の実態

収容所で病気や怪我をしたとき、誰がどのように治療したかについて記憶をたどることにします。

入ソ早々は、収容所内に医療施設が全くありませんでした。柵外にあるソ連軍のための医務室が唯一のもので、ここで検診やけがの治療を受けていました。医務室といっても医薬品や治療用具が

戸棚はなく、寝台もなく、広い部屋に机を一つ置いてソ連軍医が椅子に腰かけていたように記憶します。検診もお粗末なもので、どこが悪いと訴えても玩具のラッパのような聴診器を胸や背中に当てて鼓動を聞き、胸の筋肉をつまんで肉の厚さを診る程度、これで作業の能不能を決めます。全く名前だけの医務室で、ソ連軍医はただ一人。看護人もいません。病気になればもはや死は眼前にありと覚悟した程です。

このような状態が二、三カ月は続いたでしょうか。厳冬の伐採作業で疲労こんばいし、病人やけが人は続出します。それにも増して栄養失調患者は日一日と増える一方でした。これはたまらないと我々日本人はソ連側へ善処方申し入れました。ソ連側も抑留者受入れの遅れによる医療体制の不備を認め、抑留者の中にいる元軍医の診療を認めました。

私たちの収容所には元関東軍の軍医部長だった方を含め数人のお医者さんがいました。この人た

ちは、これまでみずから表面に出ようとはせず、同班の者には聴診器を当てたり護身用に持参した薬を与えたりされてきたそうです。いま置かれてある立場を考え、皆と行動を共にすることが最善と考えたと後ほど話されていました。

ところが情勢は一変します。ソ連側は元軍医に一步前へ出ろといい、我々も医療に専念されたいと懇願しました。こう書けば話はすらすらと進んだように見えますが、いざとなると医師側にもいろいろな注文があり、医療の態勢作りにはかなりの時間を要したように記憶しています。日医側の注文は医薬品をはじめ医療器具の整備が中心でした。ソ連側もそれには素直に応じた様子で、収容所内に一戸の医療小屋が設けられ、医薬品や医療用具が日に日に増えました。それらのほとんどは関東軍から押収したもので、骨折時の固定材に使う石膏まで包装袋「関東軍」と書かれていたのは驚きました。

日医側の医務室が診療を始めたのは、一冬過ぎ

て少し温かくなったころであったと記憶します。

医務室の前が受診者で大にぎわいした風景が今もまぶたに焼きついています。誰の顔にも「ああこれで助かった」という安堵感がありました。私も幾度か受診しましたが、主治医はいつも前記の元軍医部長さんで、大変気さくで優しい方でした。外科が専門とのことでしたが、内科の分野にも詳しく、診断も治療も的確で、収容所の全員から神様のように尊敬され慕われました。驚いたのは軍医がいるはずのソ連側まで診察を請うてきたことです。そのため日ソの診療日割り表を作った程です。これではソ連側軍医の立場がないように思いましたが、よく考えてみると医は仁なり、医道に国境はないはず。仇を恩で返す元軍医さんたちに、私は深い尊敬の念を抱いたことを覚えていきます。

主治医さんは外科が専門と述べましたが、私は偶然にもその本領をこの目で見たことがあります。受診のため医務室を訪ねたとき、主治医さん

がもう一人の医師とともに診察に使うベッド上部の天井に敷布を張っています。何事ですかと尋ねたところ「盲腸炎の切開手術をする。天井からほこりが落ちてお腹の中に入ると困るからな」と、いとも簡単な説明。私は手術の邪魔になつてはいけないと思い、後日を約して早々に引き上げましたが、あのような粗末な部屋や設備で腹を切る大手術をするとはよほどの名医であろう、と尊敬の念がますます募つたことを記憶しています。その患者は術後の回復も順調で、一カ月足らずの療養ですっかり快復し、再び作業に出役してしました。

驚いたり感心したりしたのは、主治医さんの手術ばかりではありません。私は義歯を作つた歯医者腕前にも大いに感心しました。簡単に言えば、関東軍から押収した石こうで型を取り、穴のあいた飯盒を溶かして流し込み、鑢やすりで擦つて仕上げたというしろもの。これを義歯というか否かは別として、固いものをかみ碎き、口に入れた物を

余すことなく栄養にするという点では義歯の役目を十分果たしていると言わざるを得ません。これを見た私は、歯科医は鉄工所のような仕事もするものかと感心したことがあります。しかしこの義歯、誰のために作つたかは残念ながら聞き漏らし、使い具合の程も本人に確認していません。

私たちの収容所が優秀なお医者さんに恵まれたことは不幸中の幸いでした。ソ連領内にはおよそ二千カ所の収容所があつたといわれますが、それらの収容所に、たとえ一人でも日本の軍医さんが配置され（何カ所かのかけ持ちでも構いません）、関東軍から押収した医薬品が投薬されていたならば、五万人もの犠牲者は出なかつたのではないでしょう。私はソ連軍の医療レベルが日本より低いとは決して申しません。むしろ戦陣医療では世界に冠たる腕前を持つとかねがね聞いていました。そのソ連領内において、しかも戦わずにこれほど多くの犠牲者が出たことは、一つにはソ連が戦後処理の初動で抑留者への医療的配慮に欠けて

いたと言えるように思えてなりません。

とは言っても、手遅れになった患者の命を救うのは、いくら名医でも無理というものです。私は三度同班友人の死に遭っています。三人とも医師の診察を受けたことのない人でした。日ごろの様子を見ると、その人たちは我慢強く、食物に好き嫌いが多く、われわれが野草を湯がき岩塩で塩味をつけて差し出しても、一向にはしをつけたこととはありません。このような人は、ふとした病気にも、抵抗する力が弱く、最悪の事態を招くのかもしれません。三人とも栄養失調が死因でした。

ここで、不幸にも収容所で他界された人たちは、どのように埋葬されたかを思い出してみたいと思います。さきにも書いたように、私たちの収容所では七、八十の方が亡くなりました。入ッ一年目が最も多く、二年目三年目と徐々に減ったように記憶しています。季節で言えば冬が多く、やはりシベリアの冬將軍に負けた人が多かったようです。埋葬は土葬です。しかし冬季は土が凍り

穴が掘れないので、収容所の一角に丸太杭で囲った遺体安置所を設け、屍を裸体のまま安置しました。遺体は一晚でカチカチに凍結し、二人がかりで頭と足を持ち上げても折れ曲がることは全くありません。安置所が狭かったので、凍結した遺体は春先まで積み上げておきました。安置所の祭壇には灯明や線香こそありませんが、伐採の帰りに山で折り取った緑の小枝が誰言うもなく供華に手向けられ、常にしめやかな雰囲気に含まれていたことを思い出します。

さて、一冬過ぎて三、四月ころとなれば、凍土も解けはじめ、野辺送りの季節になります。私は二回ほど埋葬の行事に加わったことがあります。一回目のときは二十人ほどで組を作り、まず関東軍から奪い取った輜重車に六、七体の屍を積み、ひき手と押し手に分かれて谷間の険しい坂道を登ります。それは道とは名ばかりの岩石のゴロゴロ露出している谷底でした。監視兵の案内で、その尻について車を押し上げる格好で登ったのです

が、途中で皆息切れして二、三度休息したことを覚えています。二時間近く汗を流したでしょうが、谷の左手に百坪ほどの立木のない平坦な空地がありました。それが墓地でした。監視兵が急がすまに、休む間もなく穴掘りにかかりました。

遺体は輜重車に三台分の二十体ほどであったと記憶します。穴は遺体を寝姿で埋められる大きさです。ところが土の溶けているのは数センチメートルの表土のみで、その下はショベルもつるはしも通りません。そのため表土を除いて周囲から枯れ木を集めてたき火をし、溶けた土を除いてまたたき火をするという始末でした。三十センチメートルほど掘ったでしょうか。誰言うともなく「オオカミに掘り起こされない程度にしよう」とのことです、この深さに止め、盛土は周りの表土をかき集めて厚く盛り上げ、土饅頭を作りました。それぞれの土饅頭には遺体の頭辺りにあらかじめ準備した墓標を立て、脚の辺りに緑葉のついた木枝を挿して掌を合わせ、最後に皆で「海行かば」を合唱

して故人の冥福を祈りました。墓標は前夜作ったもので、そこには出身県名と氏名が墨書されていました。墓地を離れるとき、監視兵（蒙古系の兵隊）が何を思ったか私を手招きで呼び、軍服の下から首にかけていた十字架のペンダントをそっと見せてくれました。多分我々の埋葬の風景に感動し「自分も冥福を祈ったよ」と言いたかったのではないのでしょうか。無宗教の国ソ連に、このような軍人がいることに驚きもし、親近感を味わった一刻でした。収容所に帰りついた時は、すでに日もとっぷりと暮れ、夕食最中の班の皆さんから「ご苦労さんでした」とねぎらいの言葉ももらいましたが、それはそっくり今日埋葬したなきがらに捧げる言葉にしたいと思ったことでした。

六、ダモイトウキョウ（帰還）

「ダモイトウキョウ（日本へ帰る）」、この言葉が真実味を帯びて私たちの耳に伝わったのは昭和二十三年の春まだ浅い四月ころであったと記憶し

ます。うわさのとは収容所長（作業大隊長）の自動車運転手を勤める日本人の話でした。これまでうわさと出所が違い、何となくこの話に信用が持てるように思いました。そういえば最近の作業の内容が従来と違い過去三年の片づけ仕事や整理作業が多くなり、我々に接するソ連側の態度にも変化が見られました。そのころ私は同班の数人とともに作業大隊長と一緒に労働をしたことがあります。なぜ収容所のボスが直接指揮をしたかは知る由もありません。労働は林道の両側に散乱している坑木を拾い集めて一カ所に集積する作業でした。多分積み出しトラックが落としていったものと思いますが、大隊長は率先して坑木を担ぎ、

私たちが担ごうとするものを横取りして肩に乗せ「あそこに細いのがある」と指さしてそれを担ぐように促します。さすがに偉い人は違う、監視兵には見られない態度だと感心しました。後から考えると、この作業は閉所のためハバロフスクの極東軍司令部から巡視官が来るので、それに備えた

道路整備だったと思われるし、大隊長みずから重い坑木を担ぎ我々に軽い方を担がせたのは帰国を目前にした日本人をいたわる気持ちがあったのではないでしょう。作業中、彼は我々をせき立てる言葉を一言も吐かず、自分自身は汗だくになっていました。

それだけではありません。帰国話は一過性でなく、日常のやることなすことがほとんど帰国近しを思わせることばかりでした。身辺を整理しろとか氏名の確認とか収容所内外の清掃整理など、どれ一つとっても帰国に結びつくものばかりです。それ以上が変わったのはノルマのある作業が全く無くなったことでした。あれほどやかましくせき立てられた伐採作業が無くなり、拍子抜けした心境に陥ったことを覚えています。先に書いた坑木集めの作業もそんな中での仕事でした。

ソ連側が私たちの帰国を正式に発表したのは五月初めころであったと記憶します。その日は早朝にすべての私物を持って広場に集まれとの伝達

で、いよいよ帰国だと皆張り切って広場に集合しました。しかし、このときは終日厳重な私物検査に終始し、特に刃物・手帳・メモ・書物の類は全部没収され、日本新聞なども没収の対象になりました。朝の集合時にぎゅうぎゅう詰めにしたリュックも、再び班に戻るときは半分ほどになっていました。「なーんだ、まただまされたか」と皆ガッカリしたことを覚えています。それから数日たったところです。再び全員集合の命令がありました。今度はその前日にアクティブを通じてソ連側がハッキリ「君らは明日ここを出発して日本へ帰る。明朝八時までに収容所の正門広場へ集合せよ」との予告がありました。それを聞いたとき、期せずして歓声が起こり、その夜は喜びと興奮で一睡もできなかったことを忘れません。

翌朝は早々に指示された場所へ集合しました。さあ、それからが大変。すぐ出発かと思いのほか、ソ連将校の点呼です。ロシア語の名簿を読み上げるので日本語のイントネーションと随分違

い、本人であることの確認に手間を取りました。そればかりでなく、呼び出した者を「お前はあっち、君はこっち」と二派に分けました。なぜか、そのわけは列車に乗ってからわかることになりました。点呼にたっぷり二時間は費やしたでしょう。そして、隊伍を組み、いよいよ出発です。ルンルン気分です。収容所よバイバイ、山よさよなら！

そのころになるとソ連側の将校や兵士が一張羅の服装で集まってきました。ナホトカまで我々に同行するためです。三年前に登った道を下るわけですが、そのときと全く違った晴れ晴れとした気分です。帰国の第一歩を踏み出しました。点呼で分けられた二派は別々に隊伍を組みます。林道の両側を見ると、どの山もきれいに伐採されて緑の草原になっていきます。我々日本人の手で伐採した山々で、その中の所々に枝ぶりのよい赤松が点在していたのが印象的でした。この松は伐採時ソ連側の指示で残したもので、この樹の種子が周囲に飛散

して何十年か何百年後には再びシベリア樹海の一部によみがえる種木（たねぎ）です。はげ山になつた草むらは我々にキノコや野草を恵んでくれた斜面です。林道も、登ったときとは比較にならないほど立派になり、幅も広くなっています。これにも我々日本人の汗とあぶらがにじんでいました。夏の伐採できない季節に泊りがけでつるはしを振つた道です。山肌や林道に尽きぬ郷愁を覚えながら、いつの間にかシベリア鉄道のノボパブロフカ駅に着いていました。

ここでまた一騒動です。ソ連側は我々を駅前広場に集め、また点呼を始めました。このとき呼び出された人は二十人ほどで、山で二組に別れ、ここで三組になつたわけです。呼び出されない組（これが最も多く、私もその一人）は列車の乗車区分が示されました。一緒に帰ろうと前々から誓っていた私たちは、このように分けられると気が気でありません。列車待ちの間、何か情報を得ようとソ連側に尋ねましたが「上司の命令」と答

えるだけで要領を得ません。最悪の場合、いずれかの組はまたここで回れ右になる心配もありました。ソ連側のやり方にはほとほと参りました。

広い原野の中に点のように建つノボパブロフカ駅、右を見ても左を見ても丘陵が続き、はるか彼方に地平線が望めます。待つほどに、バイカル湖方面の地平線に一条の煙が望見され、それが刻々と近づいてきます。我々を乗せる貨物列車でした。随分長い列車で、貨車を数十両は連結していたと記憶します。列車は引込線に進入して停車し、乗車が始まりました。一貨車二、三十人程度で上下二段式。比較的ゆったりとした感じでした。しかし、収容所と駅で分けられた組を見ると、最後尾の貨車に押し込まれているではありませんか。悪い予感がしました。これは何かが起こるに違いない。次に起こる事象とは何だろうと皆でささやき合ったものです。ともかく、列車は我々日本人の心配と、頭数だけは全員を乗せて発車しました。これでノボパブロフカも見納めです。い

や、見納めになってくれと祈りながらの出発でした。まだ残雪が点々と残る荒野をひた走りに走ります。三時間ほどでチタ駅に着きました。列車が本線と別れ引込線に入っています。これかと思いい、後部に目をやると、最後尾車はすでに切り離され、プラットホーム越しに街を眺めると、二、三台のトラックに乗せられた人たちがこちらに手を振っているのが目撃されました。分けられた二組は、この駅でどこかに連れ去られたのです。何としたことでしょう。三年もの間、苦楽を共にした人とこのような別れ方をしなければならぬとは。あまりにもひどいと思いました。一寸先は闇です。このひどさがいつ我が身に降りかかってくるかわかりません。帰国は三途の川を渡るより難しいとつくづく感じたことでした。トラック上の人たちはその後無事帰れたでしょうか。それが今でも気がかりの一つです。

チタ駅を出た列車は一路ナホトカへと走りまです。道中異変に遭わないよう口を慎み、隣人との

会話もヒソヒソ話が多かったように思います。もちろん車外の景色を楽しむ余裕などこれほっちもありません。いつどこで盗聴されているかもしれないし、まして車外の景色に見ほれておれば、スパイ行為と疑われても言い訳ができません。徹底した事なかれ主義を貫きました。それゆえチタからの道中は、ハバロフスクでしばらく停車したこと以外は全く私の頭に残っていません。ふと気づいたときはナホトカに停まっていたというのが正直なところですよ。

ナホトカは戦後ソ連抑留者の帰還港に急造した港で、それまでは波止場もない寂しい漁港であったと言います。私たちが到着したときは、列車の引込線が何本もあり、それが長い貨物列車で満杯でした。このころ日本人の帰還は最盛期で、奥地からの帰還列車が連日到着していたようです。私たちの列車も駅に着く手前で長い時間停車しましたが、多分引込線待ちをしていたのでしょう。昼前に着いて夕方まで貨車に閉じ込められ、このま

ま収容所へ逆戻りするのではないかと心配した程です。後ほど聞いた話では、実際にここまで来て元の収容所へ帰された集団もあったそうです。理由は民主活動が不十分だったからだと言いました。そんなことが理由になるとは、ソ連という国のもう一つの顔を見た思いがしました。

やっとの思いで宿舎に落ちつきましたが、辺りはすでに暗くなっていました。環境の変化もあり、長旅の疲れも手伝って皆茫然自失の体です。

そこへ宿舎の世話人なる若者（日本人）が現れ、ここでの生活の心得やソ同盟賛美をとうとうと演説します。その態度は堂々たるもので、山男がいきなり大学で高名教授の講義を聞くようなものでした。連日奥地から到着する多数の帰還者を取り扱っているうちに、自然と身についた語り口のようには思われます。話の要旨は、船待ちに四、五日滞在しなければならぬこと、日常の起居は宿舎のルールに従うこと、所持品は飯盒と水筒及び雑のうに限られること、乗船待機中に民主化運動の

仕上げを行うことなどでした。話を聴き終わった私たちは、ここまで来れば後はスッポンポンになっても帰国の夢を果たしたいと思いい、それには唯一従順が味方すると覚悟しました。自分の寝る場所を決め、形ばかりの夕食をとり、夜は早速世話人の指示に従って舎外に出、共産党の歌「インターナショナル」の練習です。この歌はノボパブロフカで一度も歌ったことがなく、曲はおぼろげに知っていましたが歌詞はチンプンカンプンです。世話人からひどくしかられ、こんなざまでは日本に帰せないと言われました。これは一大事とばかり、その夜は遅くまでこの歌の暗唱に熱中したことを覚えています。

翌日は朝から私物検査があり、午後は身体検査と消毒がありました。忙しいような暇なような変な一日でした。組上の鯉の心境で、煮ようが焼こうが勝手にしてくれと開き直りました。私物検査は、すでに山の収容所ですっかり吐き出していますからここで没収されるものはほとんどありません。

ん。全員見事パスでした。昨夜の歌の不出来を取り返した格好です。衣服の消毒は山と同じ熱気消毒であったように記憶します。これで乗船準備完了。その夜は「インターナショナル」や労働歌の練習をし、世話人の生々しい日本の戦後事情を聞いて一日を終わりました。

三日目は大変なことが起こりました。山から一緒に来た軍医さんの一人が帰国取消しになったのです。皆驚きました。聞くと本人の帰国条件に何の落ち度もないのですが、ソ連側が残ってくれと頼んだということです。軍医さんにとっては大迷惑であったに違いありません。返事を一日待ってくれと相手に伝えたそうですが、懇願を断わりかねてナホトカにとどまることを了承されたそうです。これについて、深い事情は知りませんがソ連軍の医師不足は私たちが山で十分経験済みのこと、ここでも同じ事情にあったのではないでしょう。日本で首を長くして待ちかねているご家族のことを思うと堪えがたい気持ちでした。この軍

医さんはまだ若く、いかにも「お医者さん」というタイプの方でした。夜は前日同様大声で「インターナショナル」を歌い、ソ連への感謝の言葉を唱和し、日本の民主化を叫び、拳をあげて終わりました。

四日目は朝早くたき起こされました。日本から迎えの船が来るといことです。朝食を済ませてすぐ港の栈橋へ急ぎました。いよいよ今日出発かと思うと感無量。早朝のこととて港はまだ静まり返っています。二、三隻の貨物船が湾内に停泊していました。我々は帰還船の着岸する岩壁近くで腰をおろし、山から付き添ったソ連将校の点呼をうけ、着船を待ちました。しかし、迎えの船は一向に姿を見せません。果報は寝て待てとばかり居眠りする連中もあちこちに現れました。それでもソ連側から何の指示もありません。結局この日は乗船できず、大きな夕陽が港を取り巻く小高い山に沈むころ、また元の宿舎へすぐと戻らざるを得ませんでした。待ちぼうけを食った一日で

した。

五日目、この日も朝から棧橋行きです。今日こそはと当てもない願望を抱き、皆の足取りは軽やかです。岩壁に座り込みます。午前中は空振り、昼食はにぎり飯でした。それを食べ終わるか終わらないころ情報が伝わり、船が見えたとの知らせ、さあ、ついにシベリアを離れる時がやってきました。それから小一時間ほどで船は入港し、手なれたかじさばきで接岸しました。眼前に見る日本の船、子鹿のように甲板を走り回っている若い船員、船尾に翻る日章旗。ああ、負けてもまだ日本はあつたのだと感動しました。目をブリッジに向けて「ご帰還おめでとう、長らくご苦勞さんでした」と大書した垂れ幕が下がり、その下に色とりどりの切り花がバケツに盛って置かれています。船長さん以下全船員の心尽くしの贈り物でした。早く乗りたい気持ちを抑え、船を見上げながら日ソの乗船手続きを待ちます。先ほど乗り込んだソ連側の係官が降りてきました。いよいよ乗船

です。タラップを踏む足は軽く弾んでいました。

船は明優丸という一万トン級のリバティ船です。この船は戦時中米国が兵員や物資を運ぶため、飛行機のB29と同じように同一規格で大量生産した輸送船と聞いています。終戦時、日本は大型貨物船のほとんどを失ってしまいましたからナホトカ通いも米国製の船に頼らざるを得なかったのです。戦争のさなかに二度輸送船で南方へ行った私は、船内の匂いがたまらなく懐かしく感じられました。

全員乗り終わり、タラップが揚げられたのは午後三時ころであつたと思います。船倉に入り各自の寝場所が決められた後、皆甲板に出て山から付き添ってきたソ連側の軍人に別れを告げ、ナホトカの宿舎世話人にもお礼を言い、手を振り交わして出港待ちました。しばらくして船に振動を感じ、スクリュウの回転を知ります。待ちに待った一瞬です。途端に故郷で待つ父母の顔が頭を横切りました。

船が港を出ると、間もなく船内放送があり、船長から改めて帰還の祝いとねぎらいの言葉がありました。そのあとで、ソ連の領海内では同国の駆逐艦が船を先導している、その間はソ連に不利益な言動を慎んでもらいたい、それが知れると停船を命じられ、張本人はまたシベリアへ戻される、くれぐれも注意されたいとのこと、これには驚きました。一体ソ連は我々をどこまで苦しめれば気がすむのかと言いたくなります。脅かしかと思いましたが、これも実際に戻された例があったとのことです。その後、夕食が出ました。久しぶりの味噌汁に皆歓声をあげたものです。待ち焦がれた香りでした。味噌汁といえば、収容所で黒パンを原料に何度も味噌造りに挑戦し、その都度失敗に終わっていました。シベリアの空気には味噌麴の菌が混じっていなかったのかもしれない。

しばらくたつと、また船内放送が流れました。船はソ連領海を出たという知らせ、急いで甲板に出、薄暮の海面を眺めました。が先導艦の影はす

に消えていました。船内は急に騒がしくなり、船員さんの出入りも多くなりました。船室のあちらこちらに車座になって山の苦勞話や帰り着く故郷の話に花を咲かせています。船員さんを座に引き込んで日本の現状をあれこれと尋ねるグループもありました。早くも上陸後の算段でしょうか。

そのような中で、ある一つの問題について議論している一座がありました。それは山の収容所でアクティブと呼んだ面々に制裁を加える是非を論じていたのです。聞き耳を立てると、是とする側は、ソ連にこび我々を高圧的に苦しめた、自分は楽をしてその分我々に余分の労働をさせた、民主化とか何とか言いながら自分だけがよい目をする個人主義だ、大衆裁判をやって陳謝させよう。非とする側は、アクティブはソ連と我々との間に立って緩衝材の役割を果たしていた。彼らがいなければ今以上に抑留されていたかもしれない、大衆裁判は山にいるときやれば意味もあるが、ここでは単なる「いじめ」に過ぎない。なるほど両者

の言い分には一理があります。私は過ぎたことにはこだわらないたちで、非の意見に賛成でしたが、わざと議論の輪に加わらず話の行方を見守っていました。幸いにも決着がつかないまま幕切れとなり、大事に至らずホッとしたことでした。

船は暗闇の日本海を舞鶴港に向け一路南下しています。風もなく揺れを感じない静かな航海です。最前から音量を絞り込んだラウドスピーカーが日本の小学唱歌や子守歌を流し始めました。郷愁は一層高まります。夜が更けても眠るのが惜しいような一夜でした。

朝になりました。陸地はまだ見えません。それでも甲板は人でいっぱいです。一刻も早く日本を見たい一念で集まった人たちです。その中には昨夜大衆裁判で口角泡を飛ばした人の顔もありました。けろっとしたもので、私に語りかけて「日本全体が故郷のような気がする。日本人は皆兄弟ですよ、仲良くしなければ」と。昨夜彼は「是」の組でした。私も含めて甲板に出た人たちは容易に

船室に帰ろうとせず、刻一刻と日本に近づく実感をかみしめながら、飽きもせず海原の彼方を眺めています。

朝食を終えてしばらくたったとき「島が見えた」との声に皆が総立ちして甲板に駆け上がりました。見ると薄い墨絵のような島影が海の向こうに浮かんでいます。間違いなく日本の本土です。もうこの場を動くことはできません。大勢集まっている割には静かな甲板です。皆が皆、万感胸に迫り、言葉にならなかったのではないのでしょうか。島影は次第に明瞭に大きくなり「日本だ日本だ」と叫ぶ声が聞こえてきます。島は薄墨色から目も鮮やか緑に変わり、枝ぶりのよい松の独立樹が望見されます。そのころ、船内放送があるから船室へ戻るよう指示があり、後ろ髪を引かれる思いで甲板を降りると、船長さんからシベリア暮らしのねぎらいと、あと一時間ほどで舞鶴湾口に到着し、それから一時間後に着岸予定。停船後の行動は港内係員の指示に従って下さいとの挨拶があり

ました。

予定通り湾口到着です。それからしばらく湾外に停船しましたが、湾内に入ってから港の棧橋接岸の時間は予定より早かったように思います。やれやれと思えました。望みが果たされたような快感とうれしさが込み上げてきました。時計は正午少し前だったと記憶しています。待つことしばし、係員が数人の誘導員を伴って顔を見せました。彼らの指示誘導で動きます。まず身体消毒です。全員後部甲板に出て縦一列に並び、右舷の前部甲板へと進みます。そこにはアメリカ兵が筒のついた噴霧器のような器具を持って立っており、進んでくる者の首、袖口、ズボンのバンド部に筒を突っ込み白い粉を吹き込みます。これでオーケーです。聞くと、この粉は万能殺虫剤のDDTでした。戦後米国が持ち込み、大いに使われましたが、人間にも効くということで使用禁止になった消毒剤です。確かに我々の体にはシラミの一匹や二匹は寄生していたかもしれませぬ。これを見逃

すと大変です。シベリアの汚れを徹底的に断ち切ってくれたことはありがたかったと今でも思っています。

消毒済みの体で案内者の後から下船しました。ある建物に着くと衣類の新品が支給されてそれと着替え、さらに別室に進むと昼食が準備されました。中身は忘れましたが、久しぶりの日本食に舌鼓を打つたことは覚えています。ここで暫時休憩。どこからともなくコーヒの香りが漂ってきます。数年ぶりの香りにいたたまれず「どこにあるの」と誘導員に尋ねると「米国兵の飲み物です」とキツパリ断られたのには驚きました。案内者の話では、ここには帰国者あてに全国から手紙やはがきが届いている。それを原別・姓名のアイウエオ別に仕分けしたボックスがあるから休憩中に見て下さいとのこと。さすがは日本だと全員が走りまわりました。案内の通り郵便局のような仕分け棚が並んでいました。飛びつくように自分あての便りを探します。多くの人に届いていました。中に

はそこですぐ開封し読みながら休憩所に帰る人もいました。しかし、便りの内容は必ずしもうれしいものばかりでなく、帰国の喜びも一通の手紙で吹っ飛んだ人もあります。私と同班の人は手紙で奥さんの死を知り、帰り先を生まれ故郷の三重県から奥さんの墓があり子供さんの待つ新潟県に変えていました。私あての便りはというと、何度捜してもありません。泣くも笑うも先に持ち越されてしまいました。帰宅後の話では投函が遅れたのだそうです。

休憩後、帰還の事務手続きがあり、復員証明書と路銀及び当座の寝食にリュックいっぱいのだき物の交付を受けました。その上復員事務所では行先に応じて国鉄の乗車手続きや座席の配慮までされていて、本当に至れり尽くせりの厚遇に、今でもありがたく思っています。港からの出発は行き先によって違うため、私たちの集団は港内で最後の集いを行い、お互いに手を握り合い無事の帰還を喜び、今後の幸せを祈り合って集団行動に

ピリオドを打ちました。

それにしても、舞鶴市の歓迎ムードといい復員事務所の身に余る厚遇といい、全くの予想外で、その感激は言葉や文字に表現できないものがあります。け飛ばされても、負け犬と酷評されても、仕方のない立場です。それを列車の座席まで確保して故郷へ帰して下さるとは夢々思ってもいなかったことです。シベリアで描いた私の帰国経路は、まず舞鶴の警察署で路銀を借り、鉄路で故郷の近くにある姉の嫁ぎ先（久居市）を訪ね、両親や妻の様子を聞き、何が起こっていてもぐいっと受けとめる覚悟をする。それが昼間ならば夜を待ち、夜陰に乗じてわが家の戸をたたくというものでした。しかし、この計画は完全に御破算になりました。なぜならば帰途の方面別に乗車列車が指定されていたからです。ままよとばかりに指定列車に乗りました。一般の人もかなり乗っていましたが座席は十分でした。「シベリアからお帰りですか、長い間ご苦勞でした」と声をかけてくれる

乗客の多いのには驚きました。私たちが想像していた日本とは全く違います。三重県まで行くには何度も乗り換えなければなりません。どの列車に乗り換えても私たちがシベリア帰りとわかると席を譲ってくれたり、「ご苦労さんでした」と声をかけてくれます。何と日本には親切な人が多いことかと思つたほどです。一つには、そのころの新聞が連日のように帰国者の名前と出身地を報道していたからではないでしょうか。

京都駅でローカル線に乗換え、伊勢に向かった者は私を含めて三人でした。話は弾み、車窓に移る景色を眺めたりしているとあつという間に亀山駅です。ここで参宮線に乗り換えなければなりません。歩道は橋を渡り橋の上から参宮線のホームへ降りようとした途端、私の足はハタと止まりました。夢ではないかと目を疑いました。何とホームから上を見上げている妻の姿がそこにあつたのです。聞けば家族親戚近所の人一同で津駅まで迎えに来ている。自分は待ちきれず、きつとこの駅

で乗り換えると思ひ、周囲の抑えるのを振り切つて一人でここまで来たということでした。実は家内とは奉天（瀋陽）で結婚し、その一カ月後私に再度の召集令状が届き、それ以来お互いに音沙汰なしの状態でした。正直なところ、私は家内との再会をあきらめていました。その家内が今、目の前にいます。

参宮線の車中では家内と何を話し合つたか記憶にありません。あまりの出来事に気持ちがあ動転していたからでしょうか。多分、両親ともに元気でいること、家も屋敷も元どおりであること、親戚も皆変わりのないことなどを家内が一方的に話していたように思います。

津駅に着きました。車内で松阪市と伊勢市まで乗る他の人と別れ、家内とともに駅の出口へ向かいます。もう逃げも隠れもできません。両親や姉たちは涙を流して喜んでくれました。近所の人た

ちも「これで太田家も一安心。よかったよかった」とわがことのように祝福してくれました。「夜陰に乗じてそつと戸をたたく」筋書きとは全く逆の帰還風景になり、何とも照れくさいやら恥ずかしいやら、それでいて心の片隅には何とも言えない安心感が沸々と湧いてくる帰宅になりました。

それにしても、なぜこれほど正確に私たちの帰郷経路と時間を留守家族が事前に知っていたか、不思議に思いました。これは後ほど知ったことですが、帰郷の前々日に舞鶴の復員事務所から村役場と留守家族に詳しい連絡があったそうです。もちろん地元新聞も報じています。知らぬはシベリアボケの当の本人だけでした。大勢の方々の温かいご配慮により無事帰れたことを心から感謝しています。

七、落ち穂拾い

ここでは前項までに書き漏らしたことや説明の不十分だった事柄を思い出したままに書きとめたいと思います。何しろ半世紀も前の経験で、当初は珍しいことでも、それを繰り返していると日常茶飯のこととなり、印象から遠ざかるものです。目線を変えて当手を振り返ると多くのことが頭に浮かんできます。その幾つかを以下につづります。

七―一、黒パンを焼く

抑留生活も後半に入った入ソ二年目の中ごろであつたと記憶します。このころになると伐採にもなれ、ノルマを早く果たす伐り方も会得して、何となく身辺にゆとりが持てるようになりました。ソ連側も日本人の気質を知ったのか初めのころほど過酷な要求をしなくなりました。そんなある日、突然「お前たちに焼きたてのほやほやパンを食べさせてやるからパン焼き窯を築け」と言い出

ンは小麦でなくライ麦が主原料です。この麦は大
麦の一種で日本では飼料作物として酪農家が栽培
しています。生地作りの発酵にはイースト菌を使
わず、もっぱらビール酵母が使われたことも初め
て知った知識でした。

自家製パンが支給されるようになって一カ月は
どたったところでしょうか。異変が起こりました。
ある日配給されたパンの切り口に点々と白い小さ
な塊が散見されます。その塊を口に入れても全く
味においもありません。周囲の部分と一緒に口
にすると、普段の味より随分劣ります。二、三日
続いたでしようか、そのうち収容所全体が騒がし
くなり、ソ連側が調査に乗り出しました。その結
果判明したことは、ソ連側の経理官が収容所のパ
ン工場へライ麦の粉を支給するとき石灰を混ぜて
増量し、増量分のライ麦粉を民間へ流して代価を
着服していたということでした。軍律の厳しいソ
連軍に、このような不正があることに驚きました
が、経理官は即刻逮捕投獄されて裁判にかけられ

たそうです。考えてみると、ライ麦粉も石灰もと
もに白色の粉で、材料のうちは見分けがつかない
かもしれません。そこを狙った犯罪だったようで
す。しかし、水を加えてパン生地を作り、これを
焼き上げると、ライ麦粉の部分は濃い茶色になり
ますが、石灰は白色のままです。一目瞭然異物で
あることがわかります。経理官もそこまでは気が
つかなかったようです。幸い毒物でなく、私たち
は命拾いをした騒動の一幕でした。同時に戦勝国
のソ連でも民間人の生活は窮乏を極め、軍部から
の横流しのあったことをうかがい知る出来事でし
た。

七―二、シベリアのお花畑

厳寒のシベリアでも夏あり春あり秋もありま
す。ただ、冬以外の季節は大変期間が短く、五月
の半ばころから八月終わりころまでに通り抜けて
しまいます。植物はこの期間に芽を出し、茎葉を
伸ばし、花を咲かせ、実を結ばなければなりません

ん。温帯のようにゆっくり構えていることはできません。その「はしりもの」はキノコ類で、日本ではキノコ狩りといえば秋の行楽行事ですが、シベリアでは五、六月が最盛期になります。また、私が「シベリアほうれん草」と名づけ、五月ころ好んで摘み取った野草が七月ころには人間の背丈ほどに生長していたのには驚きました。その地の気候や土地条件に順応して生命を維持し、子孫を残す生きざまは見事と表現するしかありません。この短い期間がシベリアでは最も山野が生々とし、いろいろの花を見ることができず。

中でも私たちの目を楽しませてくれたのは、六月の終わりころから咲きはじめる「ヤマツツジ」でした。赤松林の斜面や峡谷はこのころから一面にピンクに彩られます。冬の伐採で踏み荒らした斜面も例外ではありません。収容所はお花畑の真ん中に建てられている観すらありました。労働のない日曜日には近くの峡谷へ洗濯かたがた花見に出かけたものです。遠い異境で暮らす身では楽し

さもそこそこですが、一刻の気晴らしになったことは確かです。帰国後植物図鑑でヤマツツジの項を見ると、このツツジは野山に自生する野生ツツジの総称名でなく、れっきとした特定の種で、世界で二十五種が知られているそうです。独立した種であるからには茎葉や花期に特徴があるはずですが、当時そこまで詳しく観察する根気はなく、果たしてシベリアのツツジが「ヤマツツジ」であったか否かは確信が持てません。ただこの図鑑に日本ではこの花を「クイバナ（食い花）」と呼ぶ地方があると記されていました。収容所には物知りがいるものです。誰いうとなく花が食べられるという話が広がり、大勢の人が花摘みに出かけるようになりました。私もその一人で、花を生や塩ゆでにして食べたことがあります。「味はどうだった」と聞かれそうですが、それが思い出せないところを見ると、さほどおいしいものでなかったでしょう。何しろ「花よりだんご」の日常ですから、胃袋が満たされればそれが何よりのごち

そうでした。

収容所付近で印象に残る花といえば、「ヤマツツジ」の他に「コケモモ」と「ワレモコウ」があります。これらは花園をつくるほどではありませんが、「コケモモ」は赤松林の下を緑の布を敷きつめたように群生し、夏はあまり目立ちませんが、冬になると林の下草が褐色になる中で、ひとり青々とした葉を繁らせ、真紅の真珠のような実をつけます。やがて雪で覆われるようになっても、枯れも傷みもせずにジッと寒さに堪えている姿は可憐そのものでした。伐採のため松の根元に積もった雪をかきのけると鮮やかな葉の緑と実の紅が目飛び込み、踏み荒らしをちゅうちよしたことが度々ありました。また、「ワレモコウ」は群落とはいえませんが収容所近辺の草原風の山の斜面に点々と見られ、ひときわ背が高く細い茎の先端に楕円形で濃紅色の集合花をつけていたのが印象的でした。図鑑によると、この草の名を漢字では「吾木香」「吾木紅」「吾亦紅」などと書くそ

うで、一茶の句に「吾木香さし出て花のつもりかな」とある由です。花らしくない花の意だそうですが、シベリアで見たかぎりでは孤高を誇る威厳のようなものを感じる花でした。

七一三、無煙炭の露出層を走るバム鉄道

半月以上貨車で寝起きして樺太の対岸ソフガワニへ鮭鱒漁に出稼ぎした話は既に述べました。そのとき乗ったのがバム鉄道で、ハバロフスクでシベリア鉄道の本線と別れ、アムール河に沿ってしばらく走ると、見るからにレールを敷いたばかりと思われる線路に乗り入れます。これがバム鉄道で、日本海沿岸部の山間を縫うように北へ延びていました。この線路は戦争のさなか、アメリカの援ソ物資をソ連本土へ陸送するため、急いで敷設されたと聞きました。しかし、戦争の終わるころまだ全線は開通していなかった模様で、終戦時樺太で抑留の身となった日本人は対岸のシベリアに移され、バム鉄道敷設の強制労働に従事したそう

です。そういえば我々の乗った貨車も、この線に入ると急に速度が落ち、機関車はまきをたいて走っていました。今から思うと、できたばかりの路線で、軟弱な路盤ではスピードが出せなかったでしょう。また距離的にはどれほどの間隔であつたかわかりませんが、のろのろ列車が一時間ほど走るとに小さな駅舎が建てられていたことを覚えていません。その建物はカラマツの樹皮をはいだ丸太を使った校倉建築で、その細工からみて抑留日本人の手になる建物であることがその優美さで一目でわかるものでした。今でも緑一色の山間に忽然と現れる白い材肌のしょうしゃな駅舎の美しさを忘れることはできません。前述の「アルバム・シベリアの日本人捕虜收容所」によると、バム鉄道の建設を急務とする地域に入った日本人抑留者は路盤の新設と整備、枕木や中継補給基地建設に必要な木材の伐採、運搬、製材などが主体の強制労働に従事した、とあります。しかし、当時はそのようなことを知る由もありませんし、路

線の付近で日本人の抑留者を見かけたこともありません。

我々の列車がバム鉄道に乗り入れた翌日のことであつたと記憶します。列車はゆるい坂を登り始め、峠を越えようとしていました。有蓋貨車の小さな窓から外を眺めると、次第に列車は峠に近づき、目の前に路盤を作るために切り割った斜面が現れました。その斜面が赤い土の色でなく、黒々と光り輝く斜面です。一体これは何だろうと皆が目を凝らして眺めていたところ、誰かが「無煙炭だ」と叫びました。皆「エッ」と驚き、よくよく見ると無煙炭に違いありません。斜面から自然に落下した塊もごろごろと線路際に散乱していましたが、全部黒くてピカピカ光る炭塊ばかりでした。峠を越えても切り割った斜面が続く限り黒く光っていたのが印象的でした。無煙炭といえど石炭の最高級品です。硬くて純度が高く、不純物を含まないため燃やしても煙が出ません。このような石炭を露天掘りができるほどに埋蔵するシベリア大

陸の地下資源の豊かさに驚きましたが、その炭層を掘割り薪をたいて走るバム鉄道に、複雑な気持ちを覚えたのも事実です。

七―四、用材（坑木）の搬出と貨車積み

私たちの伐採した赤松やカラマツはほとんど炭坑の坑道造りに使われたようです。伐採して二メートル弱に輪切りして谷底へ転ばし、這い積みした坑木は、伐採ができなくなる夏の季節に搬出作業が始まります。搬出はもっぱらソ連兵の運転するトラックで行われ、われわれ日本人は山で車に積んだり、時には馬そりを使って長物（素性のよい材で、板材や校倉建築用材）を林道まで運び出しました。

搬出に使われたトラックはすべて米国製で「スチュードベーカー」と呼んでいました。多分援ソ物資の一つで、とても頑丈で、粗悪な道路を走ったり、ソ連兵の荒っぽい運転にも十分耐える車でした。箱型の荷台は取り除かれ、シャシーの上に

直接坑木を横並びに積み上げました。もちろん二本のシャシーには後部末端に四角の穴があり、坑木的一端を削って縦に打ち込み荷崩れのないように固定しました。運転するソ連兵にもノルマがあつたようで、われわれのしりをたいて積載させ、自分もせつせと坑木を担ぎ、積載が終わると一目散に山を下って行きます。その働きぶりは日本人も感心するほどで、急な斜面を等高線に沿って走ったり、凸凹の激しい山肌の林道を時には無謀と思えるスピードで運転していました。

貨車に積載する労働は入ソ二年目の八月半ばかり十月ころまでで、収容所から百人ほど出役したように記憶しています。ノボバプロフカ駅近くの仮宿舎に寝泊まりして毎日駅構内の木材集積所へ通いました。貨車は古ぼけた有蓋車で、走行中に床が抜けて脱線するのではないかと心配したほどです。そんな車を四、五十両連結して集積所の引込線へ入ってきます。日によって貨車の入構時間は違いますが大抵午前は九時過ぎ、午後は四時ご

ろであったと思います。坑木を肩で担いで積むのですが、二時間ほどで作業を完了しなければなりません。大変な重労働でした。五人が一組になって最小限二車を担当しました。積み方が悪いと走行中に荷崩れを起こし、貨車がバランスを失って事故の原因になります。そのためソ連監視兵は安定した積み込みをしているか否かを絶えずチェックしていました。貨車積みが終わるとソ連側は全車両を点検して施錠し、発車を待ちます。すぐ発車するときもあれば一、二時間後のこともありました。すべてシベリア鉄道を西に向かって走りましたから、炭坑のあるイルクーツクかタイシエットの駅へ運んだのではないかと思えます。

貨車積み労働は毎日続いたわけではありません。日によって列車の入らないときもありました。そんな日は十人二十人の小班に分かれ、駅の近くでいろいろな作業に従事しました。大抵は国営の工場や農場へ出向きましたが、時には二、三人で個人宅の手伝いをしたこともあります。私の

場合、製材所の手伝い、草刈り（干し草用）、じゃがいも掘り、キャベツの塩漬けなどが記憶に残っています。

製材所は駅の近くにあり、かなり大きい事業所でした。前述のように、山で伐採した赤松のうち、太くて電信柱のように真つすぐな松は、ソ連兵の指示で六メートルの長さに切断し、後日馬そりや林道まで運び出しましたが、それが皆この工場に搬入されていました。これらの松はここで厚さ五センチほどの板にひきます。製材機は十個ほどの鋸（伐採用と同型）を歯を一方に向けて同じ間隔で縦一列に並べ、鉄棒に固定したもので、これが上下運動をするところへトロッコに乗せた丸太を突っ込むと一度に十枚ほどの板が同時にひける仕組みでした。動力は蒸気機関で燃料には製材所自給のおがくずが利用されていました。我々日本人は用材をてこ（木の棒）でトロッコに乗せたり、でき上がった板を舎外に運び出す作業が主で、機械はもっぱら所員の手で操作されました。

この板は主に校倉型建物の屋根ふきに使う規格品だそうで、長さの六メートルは住居を建てる場合の片屋根の寸法とのことでした。

九月の終わりのころだったと記憶しますが貨車積みのない一日、ジャガイモ掘りの農作業をしたことがあります。駅の近くで林に囲まれた空地に一町歩ほどのジャガイモ畑がありました。雑草に覆われていて最初は牧場かと思ったほどです。しかし掘り返してみるとあるはあるはテニスボールを少し小さくした形のジャガイモがごろごろと地表に現れます。この作業で指図をした人物は軍人でなく、よれよれのスーツを着た役人のような男でした。多分この畑はソホーズ（国营農場）で、そのマネージャーであったかもしれません。なかなか気のきく人物で、昼時には蒸したてのじゃがいもを振る舞ってくれました。そのおいしさは今も忘れることができません。ジャガイモは寒地産ほどおいしいと聞いていますが、空腹時の感じを差し引いてもシベリア産のおいしさを実感させるも

のがありました。

先ほど「ソホーズ」という耳なれない言葉を使いました。当時のソ連には農地の私有はなく、僅かに住居周辺に「自留地」という菜園程度の農地が認められていた程度で、他は国有か共有でした。共有の農地を「コルホーズ」、国有のそれを「ソホーズ」と呼びます。コルホーズは複数農民の共同経営で、収穫物は国へ売り渡して行きました。ある日私を含め十人ほどでコルホーズへ行き、キャベツや青トマトの塩漬けをしたことがあります。これはロシア料理に欠かせないピクルスの素材作りでした。

ノボパブロフカ駅付近で見たコルホーズやソホーズでは大麦、ジャガイモ、ニンジン、キャベツなどが作られていました。大麦は主に家畜の飼料です。そういえば肉牛や乳牛を飼うコルホーズかソホーズもあったようで、駅から数キロ離れた牧場へ乾草用の草刈りに出かけたこともありです。刃渡り一メートルもある大鎌は日本でも使わ

れていましたが、これを使って草を刈ったのは初めて
の経験でした。

七―五、五葉松の実とマホルカ(代用たばこ)

われわれが伐採した山には点々と五葉松の幼樹
が混じっていました。幼樹ですから伐るはずもあ
りませんが、監視兵はわざわざ念を押すように
「この松は伐るな」と注意しました。それはこの
松の実が食用になるからです。日ごろ監視兵はポ
ケットから何か黒い小粒の豆を摘まみ出して口に
入れ、しばらくもぐもぐしてピッとほき出してい
ます。ちょうどチュウインガムをかむしぐさで
す。それが五葉松の実をかんでいるのだとわかっ
たのは入ッして一年ほどたってからのことでした。
たまたま貨車積みの労働でノボバブロフカ駅
へ出たとき、駅前でこの実を売っているのを見ま
した。彼らはこのような所で買っていたのかもしれ
ませんが。私も腕時計をソ連兵に売ったルーブル
紙幣を少し持っていたので、ビールを飲むほどの

ガラスコップに一杯ルーブルで買い、口にした
ことがあります。落花生のような味はありません
が、松やにのにおいが漂い、なればたばこのよ
うに癖になるだろうと思いました。聞けば駅付近
の住民の中には雪の降る前に収容所よりもさらに
山奥へ出かけて松かさを拾い集め、乾燥して実を
取り、これを売って生計の足しにしている人がい
るとのことでした。中国ではスイカやカボチャの
種子が食用になり、ここでは五葉松の種子が愛好
される。どうやら大陸の人たちには共通の嗜好が
見られるように思いました。

愛煙家の私は、入ッ時の心配の一つがシベリア
で自由に煙草が吸えるかどうかということでした。
当初はリュックに詰めて持ち込んだ「ほま
れ」を吸っていましたが、その量では一カ月もも
ちません。私一人かと思いのほか、収容所全体か
ら「煙草を支給せよ」の声があがるようになり、
ソ連側も無視できず収容所生活二カ月目あたりか
ら荒刻みの袋入りを配給するようになりました。

これを薄い紙で巻き、紙の末端をつばで湿して糊代わりにし、先を折って煙草を封じ火をつけます。これはソ連兵の常用煙草でした。彼らは細かく折り畳んだ新聞紙を常にポケットに忍ばせ、器用に紙巻きをつくって吸煙していました。先に書いた日本新聞は、われわれ日本人の喫煙愛好家にとって、好個の巻紙材料になりました。

しかしソ連側も真正銘の煙草の配給には限度があったようで、ある日突然煙草の代用品が支給されました。緑色の荒い粉で、ソ連人の間でも多く吸われているとのことでした。火をつけると、少し青臭いにおいがしてやや物足りない感はしましたが、吸えないことはありません。この代物、名前を「マホルカ」といいましたが、正体のほどは今も不明です。代用品とはいえ、三年間煙草の飢えから救われたことはありがたいことだったと思わなければなりません。

七一六、谷間の石はみな砥石

収容所から百メートルほど離れた所は大きな谷で、谷底には大小の岩が連なり、そのすき間を縫うように年中清冽な水が流れていました。厳寒期でも氷の下を潜って絶えず水は流れ、私たちはこの水で命を保ち、入浴や洗濯などに利用したほか、電灯までもとして文化の片鱗に触れることができました。

その谷間に連なる大小の岩石が、ほとんど砥石になる砂岩であるのには驚きました。誰が見つけたかは知りませんが、たちまち収容所内に知れわたり、折から日本式の木工用具作りが流行したときでもあって、作業のない日曜日には廃材の鋼材で作った小刀、手斧、のみ、かんなどの最後の仕上げに谷底の砥石に座り込む人たちで賑わいました。これらの用具はソ連側には凶器と見えたよう、私物検査のあるたびに没収されましたが、飽きもせずまた新しい用具が作られていました。

七―七、きのこ狩りで仲良しになったロシア人

五、六月ころのシベリアはようやく雪解けで、伐採に出かける山々は息を吹き返したように元気づきます。収容所の住人も同様で、キノコや野草で胃袋を満たすことができます。作業のない日曜日はもちろんですが、伐採やその他の作業のある日でもノルマを一刻も早く果たしてキノコ狩りや野草取りに精を出しました。

シベリアの山に見るキノコの種類は多く、シメジ、イグチ、アマタケ、ハツタケ、テングタケ、ベニタケなど日本の山にもあるキノコはほとんどすべてあったように思います。中でもわれわれが目標にしたのはハツタケで、傘が上向きになっている白っぽいキノコです。このキノコは赤松林の下には必ずといってよいほど群生しており、既述のように傘の直径二十センチメートル余のお化けハツタケを採ったこともあります。なぜこのキノコに目標を絞ったかといえば、他意はありません。ただ群生を見つけたければ短時間に多量に採れる

こと、煮ても焼いても簡単においしく食べられたからです。しかし、これほど赤松の原生林が多いシベリアでも、ついにマツタケにはお目にかかることができませんでした。

キノコ狩りは日本人の専売特許ではありません。山を歩いていると、時折ソ連の民間人に出会いました。多分鉄道沿線の部落から登ってきたシベリア人でしょう。数人の仲間が一同になり手にバケツを下げてキノコを探していました。近づいて会釈をし、バケツの中をのぞくと、柄を除いた傘だけのキノコが押しつけたように詰まっています。よく見ると日本では毒キノコと言われるテングタケやベニダケまで詰めてあります。驚いた私はロシア語ができないのでそのキノコをつまみ上げ、彼らに見せながら英語の「ポイズナス」とか「ベノマス」を連発し、身ぶりで腹痛や天国へ行く真似をしますが相手は怪訝な面持ちで私を見つめています。しばらくたって彼らはひそひそ話を始めましたが、突然笑い出し、首を振って

「ニエニエ」(英語の「ノーノー」と言います。今度はこちらが「間違ったかな」と不安になり、辺りでベニタケを取り、子供のころ教わった通りに茎を裂いてみましたが、やはりうまく裂けず、毒キノコでした。なぜわれわれ日本人には毒で、彼らには毒でないか。今もって不思議に思っています。後ほど聞いた話では、こうして採って帰った彼らは塩漬けて年間貯えて置くそうです。この辺に有毒と無毒の秘密が隠されているのかもしれない。とにかく、シベリアの山はキノコ類の宝庫のように思えました。

七十八、伐採で相棒を亡くした話

入ッした翌年の三月ころであつたと記憶します。そのころは伐採もようやくなれ、ノルマの達成に必死に取り組んでいる時期でした。その日は常連の相手が熱を出して寝込み、隣班の応援を得、まだ二十歳そこそこの若者とコンビを組むことになりました。この人は入ッ当初ランバート

ルの収容所へ送られ都会的な労働をしていたのですが、陸士出身の見習士官であつたため、われわれの収容所に移されたとのことです。名前を岡田と名乗っていましたが、私には初対面の人で、詳しい素性は知りません。ガッチリした体格に似合わず行動に敏速さを欠き、ひどく落ち込んでいるように見受けられました。転所してまだ日が浅かったからではないでしょうか。伐採は初めての経験だと聞きました。

その日は袋状になつた谷間の斜面が仕事場で、谷底に近い所はすでに伐採され、その上部の稜線に近い赤松林の伐採を指示されていきました。谷底まで四、五十メートルはあつたと思えます。山肌は雪に覆われていました。風が強く、袋谷のゆえに風の吹く方向は一定せず、鋸を当てる位置が決まらない状態でした。それでも最初の四、五本は比較的細い松で、彼に伐採の仕方を話しながら難なく切り倒しました。が、次に切る松はその倍もある巨木です。風は相変わらず強く、巨木は大き

く揺れ動いています。このような場合、中腰で鋸をひき、鋸が切り口にかまれないように回し切りにします。中腰姿勢は、危険を感じたとき樹幹からさっと飛び離れる準備姿勢です。切り始めたとき、彼は私の言う通り中腰で鋸をひいていましたが、いつの間にかしりを地面につけています。鋸をひく手を止め、私は二度三度注意を促しましたが、やはりいつしかどっかと地面に座り込む姿勢に戻っていました。やっとの思いで根元がメリメリと音を立てました。私は大声で「逃げろ」と叫び樹幹から飛び離れました。その瞬間大木は大音響を立てて倒れ、斜面に沿って谷底へ一直線に滑り出しています。彼はと見ると、切り株の付近に姿がありません。

ふと見ると滑り出した倒木の下敷きになって一緒に滑り落ちているではありませんか。すわ一大事と「大変だ、皆来てくれ」と叫びながら倒木を追っかけました。その時この谷では同班の五、六組が伐採していたと記憶します。倒木は滑り出す

と加速がつき、とても私の力では滑りを止めるどころか倒木に追いつくこともできない速さでした。全く一瞬の出来事です。倒木が谷底で止まったとき、彼はすでに虫の息でした。

駆けつけた班の者とともに彼を倒木の下から引っぱり出し、白樺を伐って即製の担架をつくり、広い林道まで五、六百メートルの谷間を数人で交代しながら担ぎ出しました。一方、班の一人は伝令になってソ連監視兵とともに収容所と作業大隊へ救援を求めに走りました。林道に出た我々は彼を担架から下ろし、本部からの救援を待ちます。三十分ほど待ったでしょうか、遠くからエンジン音が聞こえ、ソ連の軍医を乗せたジープが到着、聴診器で心臓の鼓動を確かめ、急いで車に乗せて収容所の医務室へ走り去りました。その車を見送った後、我々は監視兵の指示により再び伐採現場へ戻り、夜の更けるまでノルマ達成のため働きました。私は相棒がいなくなったので、他の数組に加勢してもっぱら倒木の枝打ちと坑木の搬出

をしたように記憶しています。

収容所に戻って医師から聞いた話では、彼は重傷で、全身に深い打撲傷があり、手足を骨折していたそうで、急遽ソ連軍の病院へ転送されたとのことでした。病院といってもどこにあるか知る由もありません。チタとかイルクーツクであろうとのことでした。いづれにしてもノボバブロフカからは遠く、途中の介護が心配されました。この心配は的中し、二、三日後ソ連側から伝えられた情報では、病院に到着するまでに死亡が確認されたとのことでした。

八 後記

半世紀も前の記憶である。どのような形であれ、これだけは書き残したいと常々考えていたのがシベリアでの体験記であった。それは自分史の中で第二次大戦の終末に遭遇したあかしをとどめることになるからである。筆をとると、意外なほど当時の状況が頭によみがえる。あれも書きたい

これも記録したいと思いい出したままを自由につづった。中には思い違いがあるかもしれないが、誇張や虚言はない。皆実際に体験した事柄ばかりである。

書き終えたころ、朝日新聞の声欄（読者の投稿文）に「シベリア抑留の記録を残そう」という投書が掲載された。投稿者のいわく「シベリア抑留の体験者は、それを自分の恥としてあまり書いたり話したりしない。書店に入ってもこの種の本は全く目にとまらない」と。そう言えばこの回想文を書き始めたころ、近くの書店を二、三軒のぞいたが、この種の本は一冊も目にとまらなかった。恥は恥としても、それが実体験であるならば戦争の愚かさや悲惨さを後世に伝える記録として書き残すことも意味があるのではなからうか。

【執筆者の紹介】

略 歴

生年月日

大正六年十一月八日

住所 三重県一志郡三雲町大字小舟

江

最終学歴

昭和十三年三月 三重高等農林学校農学科（現

三重大学生物資源学部）卒業

職歴

昭和十九年五月 奉天農業大学助教

〃 二十四年四月 岡山県立農業専門学校助教

〃 二十六年四月 三重大学農学部助手

〃 四十年四月 同大学助教

〃 五十一年三月 同大学教授

〃 五十六年三月 同大定年退職

〃 〃 四月 愛知県江南女子短期大学講師

（食品材料学）

平成元年三月 同大学依願退職。以後自営

（農業）

軍歴

昭和十三年十二月 現役兵として第二十師団歩兵

第八十連隊（朝鮮大田）へ入

営

豊橋予備士官学校入校

同校甲幹教育終了、原隊復帰

第九航空教育隊（満州チチハ

ル）へ転属。少尉任官。予備

役編入後引き続き召集

同隊宮崎県高鍋へ移駐

シンガポールへ兵員輸送。七

月 中尉任官。九月 中隊長

被命

シンガポールへ兵員輸送。三

月 同隊島根県松江市へ移

駐。五月召集解除

満州奉天にて再召集。英気第

一二五師団挺身大隊（通化）

に入隊

ソ連軍要撃出動、布陣地へ向

かう途中終戦の玉音放送を聞

く。通化へ戻り同地にてソ連

抑留歴

軍に拘束さる。

留日本人医師の診療が始まる。

昭和二十年八月

二十日ころ、満州吉林市の師道学校（仮収容所）に収容される。ここで三カ月を過ごす。

〃 〃 六月

伐採は休止され、林道の新設拡幅、用材の搬出作業が始まる。収容所から遠隔の地は現場に仮小屋を建てて寝起きした。伐採労働の再開は十一月。

〃 〃 十一月

下旬仮収容所を出発、満州里からシベリア入り。同鉄道をチタから西に向かいノボパブロフカ駅下車、徒歩で十キロメートルほど山奥の収容所に入る。翌日から伐採労働始まる。

昭和二十二年三月

収容所内に多人数収容の大型住居の建設が始まり、少し間をおいて浴場・パン焼き釜・発電室などの建設が進められる。

〃 二十一年一月

元旦に零下六〇度の山で強制伐採に従事した記憶は忘れられない。

〃 〃 六月

ソフガワニ（日本海に沿う奥地）へ塩鱒製造の労働に向く（往復路の所要日数を含め約二カ月）。

〃 〃 三月

飢餓と酷寒で栄養失調や病人が続出し、医療体制の改善をソ連側に求める。その結果抑

〃 〃 八月

下旬、ソフガワニから帰所するや再びノボパブロフカ駅の

仮宿舎に寝泊まりして坑木の
貨車積載労働に従事する。こ
の間、積載のない日はコル
ホーズ・ソホーズ・製材所に
出向き、雑用に従事。

〃 〃 十一月
多分この時期から伐採ノルマ
が軽減されるかノルマそのも
のが無くなったように記憶す
る。

〃 二十三年五月
帰還。月の半ば過ぎノボパ
ロフカを発ちナホトカへ向か
う。ここで四、五日船待ち。
二十日過ぎ明優丸に乗船。翌
日舞鶴へ上陸。復員手続きを
済ませ、故郷へ向かう。

現在、全抑協三重県支部の理事として活躍されて
おります。

(三重県 宇平 博)

シベリア抑留回想記

滋賀県 林 憲 一

運命

私の祖父(五代目)林尚美は、明治三十八(一
九〇五)年二月、日露戦争に鴨緑江軍第七野戦郵
便局長として約一年間、奉天(瀋陽)に勤務(高
等官八等待遇)。

父(六代目)林尚憲は、昭和九(一九三四)年
より旧南滿州鉄道会社社員として奉天本部に勤務
(職員↓副参事)、昭和二十一年六月引揚げまで十
二年間、奉天に在住しました。

私(七代目)林憲一は、父とともに渡満(当時
小学四年)、昭和二十年三月入隊まで十一年間、
奉天に在住する。三代も奉天に住むというのも、
これも何かの因縁と感ずる。